
5番目の蠍

つきもとなう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5番目の蠍

【Zコード】

N1557Z

【作者名】

つきもとなづ

【あらすじ】

岡本日和は普通の高校一年生。でも彼女には秘密がある。実は超能力者なのだ。

それは、物を動かすとか、遠くを見る能力ではない。ほんの少し先の未来が見えるだけの代物、予知能力なのだ。予知能力を駆使して大富豪！人生楽勝、なんでもかかつてこい。と、思つたら実は予知能力ではなかつた。タイムスリップ？それも違つ。

では、どうして未来の出来事がわかるのか？

「私はいつたい誰なの？ あの人は私なの？」

これは、彼女と四人のお友達に起きた、不思議な物語。

第一章

第一章　岡本日和の場合

あたしにはちょっとした秘密がある。実はエスパー、超能力者なのだ。

と、言つても手を使わずに物を動かしたり、遙か遠くを見るとか、はたまた空を飛べるとか、そんな凄い力ではない。

あたしの超能力はずばり、未来の出来事がほんのちょっとわかる、未来予知なのだ。

でも、これは自分でコントロールは出来ない、突然やつてくる、まるで思い出すかの様に未来が見えてくる代物。

あ、自己紹介が遅れた。あたしの名前は岡本日和おかもとひより、今年高校に上がつたばかりの一年生。カーキ色のブレザー、赤と茶のチェックのスカートの制服が可愛い青葉学園の生徒だ。

入学して一ヶ月以上が経ち、学校にもクラスにも馴染んできた。尤も、あたしみたいな要領のいい人間には馴染むのに努力を要しない。更に未来予知の力までもつている超人だからね。

五月の朝の登校時間。新緑の季節。風はまだ少し冷たいけど、天候は素晴らしい。まるで、あたしのこれから人生を暗示しているみたい。

あたしの予知が正しければ、後ろから声を掛けられる、「おはよう日和ちゃん」って。

「おはよう日和ちゃん」
ほらね。

「おはよう、咲良」

この子は、宮原咲良みやはらさくら、子供の頃からの幼馴染。長い綺麗な黒髪と物静かな口調と態度が特徴的な人だ。でも、実は怒ると怖い人、子供の頃から良く怒られた。別にあたしが悪い子だった訳ではなく、

咲良が怒りつぽいだけだ。

次は誰に話しかけられるかな？ あたしにはわかっているけどね。

「おはよう、お一人さん」

「おはよう」

「おはよう、相変わらずいい顔してるね」
このすらりと背の高い男子は、木村悠一（きむら ゆういち）、金持ちは坊ちゃん（かたひら なつ）だ。
金持ちは憎い。おまけに顔もいい、礼儀も正しく紳士的な雰囲気。
でも、ずれてる。妙におかしな価値観を持つた人だ。この人も子供の頃からの友達。

そして、この角を曲がると私達を待っている人がいる。

「おはよう、みんな」

と、明るく挨拶をしてくるのは、片平奈羽（かたひら なつ）だ。彼女も幼い頃からの友達。小さくて、明るくて、優しい印象の人。つまり、可愛らしい容姿と可愛らしい言動で周囲を騙くらかして生きている人だ。本人にその自覚がないのも問題。更にあたしと少しキャラがかぶつて面白くない事も多々ある。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね？ 寝不足？」

「うん、徹夜でゲームしてた」

「この子は重度のゲーマーでもある。

そろそろ、あの人が後ろから慌しく走つて来るはず。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

とか言って。

この人が伊吹圭（いぶき けい）。特徴のない男、何を考えているかわからない、多分何も考えていない。アドリブだけで生きている不思議な生き物。待ち合わせにも遅刻する最低な人。でも、この中では一番古くからの友達。

「伊吹……、ぜえぜえって擬音か？」

「何か面白い表現だね」

「あなたは、もう少し余裕を持って行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

「これで私の友達は全部。友達は友達でも親友かな？ 親友とも違うかも、好きとか嫌いとかでもない、気が合つ、合わないでもない。一緒にいると自然、それが一番近い表現かもしない。なぜか、五人で集まると落ち着く。誰一人欠けても駄目、五人で一人つて言う感覺。

教室ではいつも通りの日常。何気ない会話が聞こえてくる。

「まあ、事故にあつてくれてよかつたよ。あいつも振り向いてくれそうだ」

「おお、よかつたじやん」

「ラツキーと言えばラツキーだな」

他愛のない恋愛話や、昨日のテレビの話などに華を咲かせている。だが、あたしは知っている。一時限目のみんなの恐怖に歪む顔を。「体育館からピアノ無くなつたらしいよ？」

「何それ？ 泥棒？」

騒がしい雑談の中、あたしは得意げにホームルーム前にも関わらず、日本史のテキストを広げ勉強を始める。

「岡本さん、まじめだね」

「まあね。準備万端で挑みたいから」

と、前の席の子の言葉に応対する。その子は不思議そうに私を見る。でも、教えてあげない。今更知つても遅い、一時限目は抜き打ちテストなのだ。しかも、問題は全部知つている。あたしつて天才。でも、答えはわからないから、調べておかないと……。

ホームルームも終わり、授業が始まり、先生が口を開く。
「中間終わったからつて氣を抜くなよ。という事で今日はテストをやる」

先生が「どうだ？ 予想外で驚いただろ」と、でも言いたそうな顔で話す。

ふふふ、あたしは先生の想像の遥か上を行く女よ……。今から驚

く顔が楽しみでしようがない……、ふふふ……。

あたしは、次々と問題を解いていく。調子がいい、多分満点。本当に人生楽。予知がいつ来るかわからないから不便だけど、それでも、他者より遙かにアドバンテージがある。

お昼休み、学食にダッショウ。大好物のエビカツサンドが今日に限って売り切れてしまう。急がないと。おっと、その前にやらないといけない事がある。めんどくさいから、放置しておく？ ああ、駄目、あいつはあたしのお財布なんだから。

三階の踊り場、木村悠一の姿見える。私は大声で呼び止める。間に合った……。

「ちょっとこっち来て！！」

悠一は驚いたそぶりもみせず、あたしの方に階段を登つてくる。

「どうした？」

「大好物のエビカツサンドが売り切れるのよ、大変なのよ」

「た、大変だな……。で、俺と何の関係があるんだ……？」

「お金貸して！ 売り切れちゃう！」

あたしは悠一に手を差し出す。

「嘘だろ……。あ、でも俺も結構厳しいんだ……」

「ああ、もういい、自分で買うから！ ジャあね！」

あたしは、そう言つと学食にダッショウ。

「金持つてんじゃねえか」

その時、下の階でガラスの割れる音が聞こえる。私は知っている、強風か欠陥かは不明だけど、二階の踊り場の窓ガラスが落ちる。それが、丁度悠一に直撃するはずだった。

あたしはこつそりと悠一の命を救つたのだ。まつ、感謝されたくてやつている訳じやないけどね。なんてつたつてあいつは、あたしのお財布なんだから、死なれると困る。

ふふふ、間に合つた。大好きなあたしのエビカツサンド。エビカツサンドはあたしの血液なのよ。

テーブルはつと。目を瞑つたつてわかる。そこに咲良と奈羽がい

るはず。柱の裏、そして窓際、いつもあの一人が席を取つていてくれる。これは予知でない、いつものこと。咲良と奈羽はお弁当で昼食を買いに並ぶ必要がないから速い。

咲良と奈羽が手を振る、あたしも振り返す。

「合唱部がね、正式に部活として認められたよ」

大好物のエビカツサンドを頬ばつていると、奈羽が言つてきた。そういえば、奈羽が前に言つていたような……。部活にする為に人数が必要だから力を貸してつて。それが、合唱部。合唱の経験なんてないけど、奈羽があまりにも必死だったから、了承してしまつていた。

「よかつたね、奈羽ちゃん。凄い頑張つてたもんね」

「うん、ありがとう」

咲良と奈羽が嬉しそうにしている。ちなみにメンバーは、この三人の他に木村悠一と伊吹圭も。つまり、いつのも五人。

「今日は色々準備あるから、正式な活動は明日からかなあ」といきなり明日? 心の準備が……。合唱つて歌うんだよね? 困つた。それでも、楽しそうに、嬉しそうにしている奈羽を見るのは好き。乗り気ではないけど、黙つておこう。

危ない、この可愛らしい容姿と可愛らしい言動に騙されかけた……。

「いつたい、いつになつたら、どこでもドアが開発されるんだよ……」

意味不明な言葉を発しながら現れたのは伊吹圭だ。

「夜更かししないで、早く寝ればいいんだよ」

奈羽が笑顔で答えているけど、なに? 会話が成立している?

「それが出来たら苦労しないよ……。今日早く寝るためにね、昨日も早く寝ておかないと、眠れない。もう無理」

圭は、テーブルに座り、買つてきたラーメンをすすりながら、何やら意味不明な事を言つ。

「じゃあ、明日早く寝る為に、今日は徹夜する、なんてどうでしょ

「う？」

「普通に死ぬ」

一日位徹夜しても死なないよ……。その前にこの一人はいつたい何の話をしているの？

「瞬間移動でもあればいいのにね」

咲良が会話にくわわる。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ
超能力という単語にピクリと反応してしまった。良く見ると、そう言つたのはいつの間にか隣に座つていた悠一だ。

「超能力って、あつたら便利だよね。お掃除とか？」

「でも、超能力って身体に悪いらしいよ。本来、人間には無いものだから使うと負荷が凄くて寿命縮むんだって」

「嘘……？」あたしはこのエビカツサンドの為に寿命縮めたの！？
「寿命以前に超能力があつたら、実験とかに使われそうだな。更に嫉妬とかなんとかで命を狙われそうだ」

あたしの知らないところで、そんな話になつっていたの！？

「どうした岡本？ そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか？」

不意に悠一に話しつけられて、大きく驚いてしまった。

「え？ ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんてある訳ないよ」

やばい、不自然だつたかな？ あたしが超能力者だつてばれたかな？ 実験されるのは嫌だよ……。

やばい、ここは逃げよう、逃げるしかない。

「あ、あたしある先するね。職員室いかないといけないんだつた。またねえ」

あたしはみんなの返事も聞かずに一歩散に逃げる。実験怖いよお

……。

はあ、びっくりした。あたしは教室に戻り、自分の席で一息つく。

実験は置いておいて、寿命が縮むつて本当かな？ 単なる噂だよね
？ どうみひよ！？

「ねえねえ。片平さんと仲いいよね？」

悩んでこる最中に話しかけられた。片平？ 奈羽の事ね。

「うん。幼馴染だよ」

「あと、なんだっけ？ いつも一緒にいる、伊吹君
奈羽と圭がどうしたんだり？」

「うん。一人共幼馴染だよ？ それがどうしたの？」

あたしはちょっと疑問形で答える。

「伊吹君が片平さんに告白したって聞いたけど、どうなったのかな
あつて思つて」

告白？ はて？

「なんの告白？」

「え？ お付き合いでしてつて言つ……愛の？」

「ええ！？ 駄おーー？」

せつときはそんな素振りはなかつたよー？ いや、あつたかも？
どうひよー？

「あ、せつときはわからないよ？ 噂になつてているから、本当の
ところはどうなのかなつて。ほら、片平さん人氣あるから、みんな
気になつていてるんだよ」

奈羽は男子から人氣が高い。小さくて、華奢で、明るくて、可愛
い、一見凄く性格も良さそう。みんな騙されている……。あの子は
作つてはいなさいけど、それは世の中をつまく渡つていく為に身に着
けたスキルが癖になつていてるだけ。本当にもつと性格が悪かつた氣
がする、子供の頃の記憶だけど……。

その奈羽と圭がねえ……。気になる。

「気になる。あたしも聞いてみるね」

「うん。無理しなくていいからね」

話題を振ってきた子はどこかへと行つてしまつ。今までなんだけ

？ はて？

でも、聞くにしても、なんて聞こいつ。放課後になつてしまつた。五月の下旬、日の入りは遅く、まだまだ陽は高く日差しも厳しいけど、時折吹く風が冷たい。夏は遠い。なんて考へてゐる暇はない。校庭の外周にはイチヨウの木が数多く植えられている。その大きさ、形は不揃だ。でも、それは、生徒それぞれがお気に入りのイチヨウの木を見つけるといった楽しみを提供してくれる。あたしのお気に入りはこれ。特徴は？ と、問われると困るけれど、大きくも小さくもない、形も良くも悪くもない。特徴がない。でも、あたしには聞こえる、「私を見て」って。なんて考へてゐる暇はない。

枯れ草が目立つ芝生。夏になると一面に真っ青な芝生が広がるのかな？ でも、今はライトブラウンの世界が広がる。時折吹く、冷たい風にサラサラと抵抗もできずに揺らされている。それは、命のない者達の残音。ああ！ なんて考へてゐる暇はない！ 奈羽はどこいった！？

いた。奈羽は何やら色々荷物を持つてゐる。ダンボール箱にボスターみたいなのとか。

「奈羽？ 少し持とうか？」

華奢な身体に大きな荷物。何か大変そう。

「あ、日和。大丈夫だよ。結構軽いから」

奈羽は笑顔で答えてくれる。

「ふうん……。重そうに見えるけど……。部室に持つていいくの？」

「そそ。明日楽しみにしてて。きっと素敵なお合唱部になるから」

あたし達は歩きながら話す。向かう方向は旧校舎。文科系の部室が多く入る校舎。怪しい部もあり、出来れば近寄りたくない。

「ねえ……。圭はどうなつてるの……？」

あたしは思い切つてストレートに聞いてみた。

「好きだよ」

ええ！？ あたしの知らないところで世の中動いてる…？

「それがどうしたの？」

奈羽の無邪気な笑顔が痛い。

「あ、うん……。あたしに口を挟む権利なんてないし……。よかつたね……」

「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」「え？」

「何の話？ 奈羽は、たまに話しが飛ぶ時がある。この子は頭がいい、あとで思えばわかるけど、想定される会話のやりとり、恐らく、そんな会話になると書いたやつとりをショートカットして行く。次の変化が来るだろうという会話まで一気に飛ぶ。集中していないと付いていけない時がある。多分これもやう。「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」、でも、どうして、この言葉に繋がるのかがわからない。

「日和、ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしてね」

奈羽はそう言うと、旧校舎の中へ消えていく。

長話をしたつもりはないけど、随分と陽が傾き、あたしの影を長く、長く伸ばす。

今日は朝から低調。奈羽と圭の事も少なからずショックだつたけど、今のあたしの心を占める関心事は、すばり「未来予知で寿命は縮むのか！？」だ。

早くも昨日の抜き打ちテストの答案が返ってきた。先生もそんなに急がなくて……。

当然に満点。驚く先生の顔もおかしかったけど、内心は複雑。テストで百点とる為にあたしの寿命が……。結構予知來ていたけど、もしかして、あたしの寿命はもう少ないの？ どうじよづ。

でも、未来予知はあたしの意思に反して突然やつてくる。些細などうでもいい予知とか。その角を曲がると誰がいるとかわかつてしまつ。

でも、これはまだ確定事項ではない。見えない敵と戦つても仕方が無い。まだ、確定したわけじゃないんだから、気持ちを切り替え

よつー

放課後になつてしまつた……。あたしは薄汚れた旧校舎の前に立つ。

「ここにいる理由はもちろん一つ。合唱部の活動初日だからだ。歌うの？ 本当に歌うの？ あたしが？ 嘘でしょ……。

とぼとぼ。今あたしの足音を擬音にしたら、きっとそんな言葉になるだろう。

場所は事前に聞いてある、一階の端の教室。階段を登ると壁には各部の勧誘のポスターが貼つてある。

定番の部活からマイナーなものまで多様。オオクワガタ同好会つてなによ……。いや、それはまだいい。庭部つてなに？ あたしの想像通りなら凄く楽しそうなんだけど。

きつとあれだよね？ なんか小さな箱庭とか作っているんだよね？ お家とか池とか作つて、お人形とか配置して？ ……、やばい、最近現実逃避が激しいよ……。

合唱部前に到着すると、教室前には奈羽を除く三人が来ていた。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入つてきてつて」

「お前はもつと余裕持つて行動しろよ」

最後の言葉は伊吹圭だ。いつぞやの仕返しか？ そちもわるよのあ……。

「そちもわるよのあ……」

やばい、心の声が出てしまつた。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

伊吹圭、古いよ。調子に乗るな。

「じゃあ、行くぜ？」

なぜか、圭が先頭切つて扉を開ける。扉は音もたてずにスースと

開く。

光が広がつた。

綺麗に掃除された教室、壁には音楽のポスター。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が両手を大きく広げ嬉しそうに叫ぶ。

その、奈羽の後ろにある大きな物体に目が行く。いやでも行く。「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」

ちょっと待ちな……。大きすぎて教室の大部分を占有しているじゃない……。グランドじゃなくてアップライトにしておきなよ……。いや、そんな事じゃなくて、強奪つて何！？ 冷静になれ……、多分いつも通り、その可愛らしさに姿と可愛らしさ言動で教師連中を騙ぐらかして運ばせたんでしょう……。

「へえ、思ったより本格的じゃん」

「ここの景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」「どれどれ？」

咲良が窓からイチヨウの木を指差す。その前にあんた等……、ピアノへのシッ！」はざわしたの？ ボケたら突っ込むのが礼儀ですよ……。

「気に入つて貰えたら嬉しいなあ」

まあ、奈羽が嬉しそうにしているのは好き。ここは素直に気に入つた振りをしよう。

「うん。気に入つた。ピアノも、その、かつこいいね……」

なぜか、みんながあたしを見る。やばい、タイミング間違えた！？ 何があるの！？ 誰かお願ひ、あたしに空氣の読み方教えて！…

「奈羽？ ピアノ弾けるの？」

「もちろんだよ」

よかつた、普通に会話が進んだ。

「今日、この日の為に曲も作ってきたよ。みんなで歌いたくて……」

そう言つと、奈羽はみんなに歌詞カードをくばる。

「じゃあ、最初は私が歌つて見せるね、一回田はみんなで歌いましょう」

奈羽はピアノに座り、弾き始める。凄くゆっくりとしたポップなメロディ。そして、奈羽が、その綺麗な声で歌う。あたしは、その歌声を歌詞カードで追う。

一番目のは私は猫だった、我只氣ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかつた。

一番目の私は犬だった、猫さんが心配だつた夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目の私は兔だった、何もかもが不安だつた夢の世界、流れるままに朽ちていぐ。

四番目の私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目の私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだつた。

楽しそうな曲調だけど、歌詞がなんか悲しい……。悲しいよ……。

みんなも同じ思いなのか、凄くまじめな表情。

そして、一回目。みんなで歌う。合唱部で初めて歌う曲……。奈羽はどうして、こんな悲しい曲を選ぶの？ あたしはどうせ歌うなら、もっと楽しい曲がいい。泣きそつ……。

部活も終わり、少し憂鬱な気持ちで旧校舎を出る。風が強い。カーンと言う音が間近に聞こえた。

「おー、ぼうつとすんな」
そう言つたのは伊吹圭だつた。凄く近くにいる。足元には空き缶が転がる。

状況を把握するまでに時間が掛かつた。

「伊吹、大丈夫か？」

「圭君、怪我は？」

「あ、大丈夫。慣れてるから」

圭が手をひらひらとさせるのを悠一、咲良が心配げに見守る。

今日、一日つこなかった。明日は、いい日になればいいな。

今日も朝からついてない。合唱部の全員が生徒指導室に呼び出された。先生もいっぱい。かなり怒っている。

「弁解を聞く?」

溜息が出る。どうして、いじ、高圧的な?

奈羽が一步前へ出る。

「ありません。私共にはなんら関わりのない事柄なので」

「無い訳ないだろ。合唱部の部室に体育館から紛失したピアノがあるんだから」

「ええ。それは不思議ですね」

ピアノを盗んだのが、あたし達、合唱部だと思われている。まず、

奈羽は盗んだの?

「誰がどう見ても、盗んだのはお前等しか考えられないだろ」

別の先生が声を荒げて言つ。

「逆にお伺いしますが、どの様な方法であの様な大きな物を旧校舎の合唱部の部室まで運搬すればよろしいのでしょうか?」

奈羽はにつっこりと笑い、話す。

「それは、こっちが聞きたい!」

「そうですね、私はてっきり、親切な方がこっそり合唱部に贈り物をしてくれたものと考えていました」

「ふざけるな……。おい、岡本! お前はなんか知らないのか!?」

急に怒鳴られビクッと反応してしまった。

「え? あ、はい?」

何か話そうと思ったときに奈羽がすっと手を出し静止される。

「何も言わなくていいよ。大丈夫だから」

奈羽はあたしに優しく笑いかけ、そう言つた。

「合唱部の部長は私です。部員達を守る義務がありますので、質問は私にして頂けますか?」

奈羽はどうして、こんなに強気なんだら? 本当にピアノはどう

うしたんだろう？

思い出した。最近は呼ばれないけど、中学までのあだ名は「ミクルナウ」だった。この子は奇跡を起こす。多分きっとそう。そんな訳ないでしょ……。

「本当にお前等じゃないのか？」

「はい。確かにピアノの紛失による利益を享受しているのは、私たち合唱部です。ですが、不正により利益を享受している者が必ずしも犯人とは限りません。その、図式が成り立つてしまつたのならばこの世界は冤罪で溢れかえってしまいます。私共は善意無過失です。ですので、ピアノの所有権も合唱部にあります。それでも、こちらに過失があるとおっしゃるのならば、先生方にはピアノの運搬方法並びに、その他物的証拠若しくは、法的根拠の提示をお願い致します」

難しくて、意味不明。寝そう。ああ、奈羽のお説教は耳に心地いい……。

あれ？ 奈羽は強奪したとか言つてなかつたつけ？ ちらりと他の三人を見ると、あたしと同じように眠そう。いや、良く見ると寝てない？

「わかつた……。この件に関しては調査する。行つていいぞ

「ご理解して頂けて感謝致します」

奈羽はいつたい、どこからそんな言葉が出てくるの……。

「しかし、本当にどこから出てきたんだろうね？ あのピアノ。偶然にも泥棒さんが部室に隠してたのかな？」

生徒指導室から大分離れ、聞こえないと思い、あたしは背伸びをしながら言つ。そもそも、奈羽が強奪したって言つたのも、あたしの聞き間違いかもね。

「日和ちゃん。偶然なんて有り得ない。全ては故意の連続により起きた必然。起こるべくして起きた事象」と、咲良が言つた。なんか今日はみんな難しい言葉を使う。意味不

明。

でも、なんか咲良……、怒っている? 颜色も悪い……、どうしたんだろう?

「ちょっとね……。気になっていたんだけどさ……」
圭が何やら、むかし言つてゐる。

「岡本のさ……。後頭部にあるさ……」

いつたい何を言つてる、こんな時に……。はつきりこ……え?

何氣なく頭を触つたら……、何これ?

「ああ、俺も気になつていた。ちらちらつてさ」

……。ヘアピンにビール袋付いているんだけど……。ああ、そ
うか、朝からカサカサ、カサカサうるさいなあつて思つてたよ。早
く言え……。こんな物付けて、あたしはお説教されたのか……。
先生も面白かつただろうなあ、もしかして許して貰えたのは、あた
しの手柄? あたしつて天才。ふう……。

授業も全然集中できない。先生の声が子守唄に聞こえる。

最近どうも運が悪い。今朝の事にしても、昨日の空き缶にしても。
どうしたんだろう? どうして急に? はて?

いい日もあれば悪い日もある、それが人生だよね?

どこかの偉い人が言つてたよね。人生の運の総量は決まつてるので。だから今、運が悪くてもきっと、いつか幸運に恵まれるつて。
きっと明日はいい日になるよ。

……。ちょっと待つて。あたしは未来予知で不運を回避して幸運
を掴んでいるんじゃないの? つまり、運を不正に引き出している
? 将来の運貯金を使つている?

よく思い出せ……。急に運が悪いと感じじるようになったのは昨日
から。昨日はなにがあつた……?

「あああー!」

授業中に思わず叫んでしまつた……。

「ど、どうした岡本……?」

「あ、いえ、なんでもありません、すみません！」

「う……、クラス中に笑われた……。」

そんな事より、昨日はロト7の抽選日だった。そう、あたしは買つていた……。多分、というか、間違いなく一等。

人生の運の総量は決まっている。つまり……、人生の運を全部使いたしてしまった！？

この歳で！？ あ、でも、超能力って身体に悪くて寿命縮むんだつけ？ そか、じゃあ老い先短いのか、よかつた……。よくないよ！！

「はあ……」

溜息ばかり出る。お昼休みは、珍しくお外で食べる。お気に入りのイチヨウの木の下。

「大好物のエビカツサンドも美味しくないや……」

色々考えたけど、全部、あたしの想像で決まった訳じゃないんだよね……？

更に言えば、これは未来予知ではなくて、あたしの想像力が逞しくて、たまたま的中しているって事はないかな？ ……。テストの内容やロト7の的中番号が想像出来てたまるか……。

特徴のないイチヨウの木。新芽が多く芽吹き、今から夏が楽しみ。「あなたは特徴ないから、変わった形の葉っぱにするんだよ。例えば、葉っぱじゃなくてお花を咲かせるとか？ キツとみんな見てくれるよ」

イチヨウの木を見上げながら囁く。

「一人で何やってんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

と、言いながらやって来たのは木村悠一。すらりと背の高い、顔のいい男。悩みの無さそうな顔してやがる……。

「悠一……。ふつ……、あたしは悟ったのよ」

「何をだよ？」

「お金はね、命より重いって事をよ。あたしの命はお金に負けちゃ

つたのよ

「はい？ どんだけ軽い命なんだよ……」

悠一はあたしの隣に座る。

「もう！ 金持ちが憎い！」

「何言つてんだよ？ それに俺は、岡本の財布じゃなかつたのか？」

なら、お前も金持ちだろ？」

ムカッ。もうお金なんていらない。それに、あたしのお財布とか言つていたのは冗談だよ。真に受けけるな。

「高校上がつてさ、これからが楽しみだよな。海とか花火とかさ？…

……。ちょっと待つて。これが噂の死亡フラグ！？

「そうね。凄く楽しみ。みんなでずっと一緒にいれたらいいね」とか言つたら確定！？ あれ！？ 心の声が出でやつた、どうしよづー？

「いれるわ。ガキの頃から一緒だつたろ？ これからも変わらないよ」

ちょっと待つて、悠一も。さつきの発言はどう見ても、あたしらしくない発言だつたでしょ、気付け！？ あたしの人生どうなるの！？

ふう……、少し興奮しそぎた。喉カラカラ。

「そついえばさ。変な噂あつたね？ あんたが女言葉使つてるとかなんとか？」

言つた後に後悔……。どう考へても、ただの誹謗中傷だよね……、しまつた。

「ああ、あれか」

「まあ、あんたも顔いいし、お坊ちやんだし、やつかみ多いね……。あんまり気にしないでね……」

「別に気にしてないよ。事実だし」

「ええ！？」

「うん？ 意外か？ あればな、何でいうか、喋り方が移つた。岡本の「

「なんですよー?」

「なんでだろうな? 印象的だから? でも、岡本でよかつたよ。これが咲良や奈羽だつたら、ただのカマだよ」あたしだと大丈夫なの……? そう言って頂けると光栄です。

ペタペタ。変な音。これは、あたしの足音。

ヒタヒタ。変な音。これは、誰の足音?

夕焼けが綺麗。少し肌寒いけど、でも、十分に過ごしやすい。夏は大好きだけど、梅雨は大嫌い。だから、複雑。ずっと、今の季節でもいいかなって思つてしまつ。でも、夏が恋しくなるのかな?好きな事をする為には嫌な事も我慢しなければいけないって言うよね。だから、梅雨も我慢する。その先に明るい未来があるから。

ヒタヒタ。変な音。さつきより、すぐ後ろにいるような気がする。時間と共に影が伸びていく。少しづつ、あたしより前を歩くようになる。あたしも負けずに少しづつ、歩を早める。でも、影である彼女もそれに合わせるかのように歩を早める。

いつまで経つても追いつけない。少しづつ、差が広がる。あたしは一生追いつけないのかな?

ヒタヒタ。変な音。もう、すぐ後ろにいる。あたしは彼女に追いつけないけど、他の誰かは、あたしに追いつける。後ろの誰かなら彼女に追いつけるのかな?

……。って、誰よ!?

怖い……。振り返れない。現実逃避も程ほどにしないと危ない……。

まさか……、実験!? それとも、ロトフ!?

家までもうすぐ、でも、今急に走つたら不自然じゃない? 追いかけてこない?

どうしよう……。誰か助けて……。

こんな事なら未来予知なんて始めから無ければよかつたのに。あたしが望んだ訳じゃないのに。嫌な事ばっかりだよ……。なんか涙

出てきた……。

それから、あたしは家に着くまで泣き続けた。後ろの人の気配は気が付くと消えていた。

昨日は知らない人追いかけられたり、ついてなかつたけど。今日のあたしは幸運に恵まれている。

バケツの水をひっくり返してしまったけど、丁度モップ掛けの練習をしたかったところだ。ついてる。

階段から落ちそうになつたけど、手を伸ばしたら丁度手すりがあり、掴む事ができた。幸運にも下まで落ちずに、お尻を少し打つて涙目になつたくらいで済んだ。ついてる。

未来を予知していないのに、エビカツサンドが売り切れでおらず、ちゃんと買う事ができた。ついてる。

運なんて、同じ状況でも人によつて幸運にも不運にも取れる曖昧なもの。そんなものに振り回されてたまるか。

今日も、お昼は咲良と奈羽には一声掛けてから、お気に入りのイチヨウの木の下で食べる。凄く天気が良く、微かに吹く風が心地いい。

このイチヨウの木は相変わらず特徴がない。うつかりすると、その形を思い出せなくなる。でも個性がないところが特徴かも？ 人に限らず、木でも必ずいいところはある。見れば見るほど、この木は元気が良さそうに見える。うん、いい事だ。

「日和ちゃん」

「一緒に食べよ

話し掛けて来たのは咲良と奈羽。手にはお弁当を持ってい

「咲良、奈羽……」

二人は優しく笑つてゐる。なんか、嬉しい。でも、咲良は最近体調が良くないのか、顔色が悪い。凄く心配。自分の事で精一杯で、心配だけど、これ以上心配事を増やしたくなく聞けずについた。ごめんね、力になれなくて……。

「気持ちいいね」

あたし達三人は並んで食べる。なぜか真ん中はあたし。でも、さつきまでおこしなかったエビカツサンドが凄くおいしく感じる。

「今日はお揃いか?」

そう言つて歩いて来たのは、悠一。すぐ後ろに圭もいる。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう?」

奈羽が無邪気な笑顔で答える。

悠一と圭も加わる。圭なんていつもリーメンのくせに今日はパンを持参している。一緒に食べる氣満々じゃない。

「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」

「あれ? 元々合唱部の物じゃなかったの?」

奈羽の発言に圭が答えた。どうして合唱部の物だと思つたのよ…。昨日、どうして生徒指導室に呼び出されたと思ってているのよ…。それより、合唱部の備品になるって、本当に強奪じゃない……。「先生達に水を指されて、ちゃんと活動出来てないけど、早くみんなと歌いたいなあ」

「今更言つのもなんだけど、俺、歌マジ苦手」

「嘘言え。お前カラオケ好きじゃないか。謙遜か?」

「圭君マイク持つと放さないよね」

「訂正。合唱みたいな曲を歌つのはマジ苦手」

「別に曲の制限なんてないよ。好きなのを歌えばいいんだよ。みんなで、それぞれ一曲ずつ選んで歌いましょう」

いつも通りの雰囲気。

「でも、本当は合唱部じゃなくてもよかつたんだ。みんなで、この五人で集まれるなら、なんでもよかつた。今みたいな時間があれば、私は満足」

これは、奈羽の言葉。それは全員の言葉を代表して言つたものかもしれない。

あたしは前に、五人集まると自然つて言葉で表現していたけど、今はつきりわかつた。

五人集まると自然なんて言葉じや全然足りない。

あたし達五人が集まると「幸せ」と言ひ言葉になる。

今日のあたしは幸運に恵まれた。少し元気が出た。さて帰つて「天国少女・花園メグ」の再放送見よつと。

ペツタン、ペツタン。変な音。これは、あたしの足音。昨日より軽快。

チリーン、チリーン。変な音。これは、何の音？

あ……。何かにぶつかつた。

あたしはよろけてしまつた。

排水溝に片足落ちた。肩が壁にぶかつた。痛い。

なんか、足痛い。ふくらはぎが擦りむけた。

排水溝から足を抜くと、靴がびしょぬれ……。なんか汚い……。

「買つて貰つたばかりの靴なのに汚れちゃつた。ちえ……まつ！ 大怪我しなくてよかつた。ついてる。

足、冷たいよ……。

足、痛いよ……。

肩、じんじん痛いよ……。

なんか、悲しいよ。悲しいよ。

もう歩けないよ……。

あたしは、夕日の中づくまつて泣いた。子供みたいに泣いてしまつた。

よくわからないけど、悲しかつた、寂しかつた、怖かつた。やつぱり、ついてないよ。

誰か助けてよ……。

なんか、急にあたしに、ふわっと覆いかぶさつて来た物がある。

それが、人だつてわかるまで、随分長い時間が掛かった。

「日和、大丈夫だよ。心配いらないよ……」

その優しい声は聞き覚えがある。

奈羽だ。

「な……う……？」

「何も言わなくていいよ。全部知っているから」

あたしは奈羽にしがみついて泣いた。なんかよくわからないけど、

凄く沢山涙が出た。

「少し長話になるかもしないけど、我慢して聞いてね」
彼女はゆっくり話しだした。

「今日の日和は凄く辛いよね。辛くて、辛くて、泣いてしまったよね。でもね、辛くて、苦しくて、悲しい事も悪い事ばかりじゃないんだよ？」

奈羽の身体、凄くあつたかい……。

「だつて、それがどんなに苦しくて辛い事かわかつたんだから。もし、大事な人が同じように辛い思いをしていたら、理解してあげられる、そして、優しくしてあげられる」

凄くいい匂いがする。何の匂いだろう？　お花？

「生まれつき優しい人なんていないんだよ。優しい人はそれだけ、過去に辛く苦しい思いをしてきているの。だから、優しくなれるの」
何か心地いい……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すごくゆっくり。

「今日辛い思いをした日和は昨日の日和よりもずっと優しい人。そして、これからも日和はいっぱい辛い思いや悲しい思いをすると思う。いっぱい泣くと思う」

凄く耳に心地いい、ゆっくりとしたイントネーション。

「でも、その一つ一つを乗り越える度に、日和はどんどん優しい人になつて行く、誰よりも優しい人になる。私が保証する、日和がみんなの辛さ、苦しさ、悲しみ、その全てを理解して、それを受け入れ、そして、誰よりも優しくしてあげられるって」

二つの間にか奈羽はわたしの顔を両手で優しく包み、優しく微笑む。

「よくわからないよ……」

「そうね。でも約束して、辛い事があつても逃げない、目を背けないつて」

「う、うん……。頑張る……」

本当に意味がわからないけど、凄く励まされている……。と思つ

「うん。約束。じゃあ、帰りましょう。暗くなっちゃう前に」

奈羽は、まだしがみつくわたしを引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し出す。

あたしは迷わず奈羽の手を掴んだ。奈羽はにっこり笑ってくれる。夕日の中、一人で手を繋いで歩く。

奈羽はあたしより小さい。でも、凄く大きい。こうして並んで歩いているけど、奈羽が先に歩いて、あたしがその後を付いて行つているような感覚がある。それは、奈羽があたしの手を強く、強く握り締めているから、そう思うのかな？

あたしは一人っ子だからわからないけど、もし、お姉ちゃんがいたら、こんな感じなのかな？　ただ、安心できる。こんな気持ち、久しづり……。

ずつと、このまま手を繋いでいたい。

そう、思つけど家に着いてしまつた。

「足は大丈夫だけど、肩はちゃんと、お母さんに手当して貰つんだよ。あとで腫れて大変な事になるから」

「うん……」

「また明日ね。日和」

奈羽の後ろ姿を、ただ呆然と見送る。

「あ……」

突然来た。未来予知。

「あたし……。明日死ぬんだ……」

少しづつ奈羽の姿が小さくなる。

「奈羽行かないでよ、助けてよ……」

そして、奈羽の姿が見えなくなる。

「な……う……」「

もう声なんて出ない。何も考えたくない。そして、涙すら出ない。いつの間にか空は曇り、今にも雨が降りそう。凄く寂しい雰囲気。奈羽と共にあたしの幸せはどこかに消えていったみたい。

今日は学校を休んだ。昨日の奈羽の忠告を無視して、肩を放置していたら腫れた。

朝から病院。骨には異常なかつたけど、重度の打撲。凄く痛かつたけど、今は鎮痛剤のせいか、平氣。

ふとんの中から少し顔を出して、天井を見る。

昨日来た、未来予知の事を考える。

よくわからないけど、あれはどこだろ？ ただ、漠然とあたしが死んでいるイメージ。もしかして、あたしの勘違いとかないかな？ 昨日は凄く情緒不安定で、奈羽の後ろ姿を見送っているうちにおかしくなったとか？

別に体調が悪いとかはないけど、鎮痛剤のせいか眠い。うつら、うつら。今のあたしにぴったりの擬音。夢を見た。

子供の頃にうちの裏山にみんなで秘密基地を作った夢。

「立派なお家を建てましょ！」「

奈羽はいつもリーダーだった。どうして、そうだつたんだろう？ リーダーらしい言動はないのに。みんなが自然と、その言葉に従つた。

「立派だつたら、秘密じやないでしょ！」

多少の不平不満はあつたけどね。

「俺、木切つてくる」

圭が奈羽の構想を一番先に実現しようとする。

「今之内に家からこいつそり絨毯とか持つてくるね！」

咲良も限度を知らないくらい頑張る。

「作るの、だるいからさ、プレハブでもここに運ばせる？」

悠一は、何でもお金に物言わせる嫌な奴だった。

「悠一、みんなで作ることが大事なのよ。結果なんて関係ない」

意味不明なお説教は奈羽が担当。思い出せば、この頃からかな？

奈羽が得意げな意味不明なお説教をするようになつたのは、今まで洗練されて先生までも騙される。

「どうでもいいけど、日が暮れるまでには建ててよね」

あたしは不平不満担当。

木に屋根の様な物をくつつけて、薦とか葉っぱで補強。簡単な秘密基地だ。中は咲良が自宅から持ってきた絨毯とか本棚みたいな家具がある。

「完成、立派なお家！」

奈羽は両手を大きく広げて大喜び。

そうなんだよね、みんな奈羽が、こうやって楽しそうに、喜んでいるのを見るのが好きで頑張っていたんだよね。ただ、それだけだつたよね。リーダーとか関係ないよね。

秘密基地は雨とか風とか、色々な事で、掃除しても掃除しても、すぐ汚くなつて放置されたけど、あたし達の幼い頃の一一番の思い出。夢の中、遠くで変な音がする。鈍い音。

「朋ちゃん、大丈夫？」

「これは何の夢だろ？……。

「ごめん。挫いたみたい……」

そうだ、中学の時のオリエンテーションの時だ。

「困つたね。歩けそうにない？ 先生もいないし、どうしよう？……班の子が足を挫いて途方に暮れていた。

「圭？ 今どこ？ 男の子達連れて、B地点の少し先まで来て」

そう、話したのは奈羽だつた。圭がいるのかと思ったら、手にしているのは携帯電話。

「今、応援呼んだから、心配いらないよ、朋子

携帯電話の持ち込みは禁止だつたはず。

「携帯持つてゐるの見つかつたら、先生に怒られるよ……」

班の子が言つ。

「気にしない。それよりも、みんなの命に関わるような事故が起つた時に携帯がなかつたらと思うと、そつちのほうが怖いよ」

奈羽は勉強以外で先生の言う事は一切聞かない子だつた。全て自分の判断で自信を持つて自分の正しいと思う事をした。

「来た、来た。圭！ ひつちだよ！」

それから、悠一が足を挫いた子をおぶつて山を降りた。

女子をおぶつた悠一よりも、その他の女子よりも、圭が一番「ぜえぜえ」言つていたのはおかしかつたけどね。

なんか、奈羽の夢ばっかり見るね……。多分の昨日の事が嬉しかつたからかな……。

なんか、鈍い音がある……。

ああ、なんか気持ちよくなつてきた……。ふわふわ……。

飛んで行くような、沈んで行くような……。

気持ちいい……。良く眠れそう……。おやすみなさい……。

第一章

第二章 木村悠一の場合

夢を見た。

子供の頃に仲間達で秘密基地を作った事、中学でのオリエンテーションなどの夢だ。

「奈羽の事ばかりだつたな……」

俺は木村悠一。そう、木村悠一だ。酷く、片平奈羽への感情で溢れている。

別段、彼女の事は嫌いではなかつた、尤も好きと言つ程でもない。今の様な感情など抱いた事もなかつた。

意外。そう、意外だつた。

「恋愛感情でもない……かと、言つて友人へのそれでもない……。氣味悪いな……」

しかし、岡本の奴、人の事をお坊ちゃん、お坊ちゃん言つて馬鹿にしていたくせに、あの秘密基地の裏山や周辺の土地は全部岡本家所有じゃないか。お前も結構なお嬢だろ……。おかしいと思ったよ、あれだけ好き勝手に木を伐採したのに、何の問題にもならないんだからな。

あ？ 俺はいつたい何を考えている……？

やばい……、現実逃避も程ほどにしないと……。つて、あれ！？
俺、誰よ！？

木村悠一だ……。それは間違いない……。

やばい、妄想が止まらない……。なんか、鼻血出そうだ……。
俺はそんなキャラじやないだろ……。

月曜日の朝。天気がいい。明るい未来を暗示している。
「じゃあ、行つて来るね」

俺がそう言いつと、両親がピクリと反応した。

「あ、いや、行って来ます……」

俺はいつたい何を言つてゐる……？

おかしい、何かがおかしい。夢のせいか？ 大体、この岡本への妄想はなんなんだ？ まさか、自分でも気が付かないうちに、あいつに惚れたのか？

「そんな訳ないだろ……」

悩みは尽きない。前方を見ると、その話題の岡本日和と宮原咲良の姿が見えた。

「おはよう、お一人さん」

俺は早足で一人に追いつく。

「おはよ」

「おはよ、相変わらずいい顔してんね」

咲良と岡本が挨拶を返す。岡本はいつも俺をからかう。「いい顔してん」とか「お坊ちゃん」とか、言つてな。

まあ、少なからず顔には自信はある。家も地元の富豪だ「お坊ちゃん」「なのも間違いない。だが、岡本の言葉を素直には受け取れない、棘の様なものを感じる。

岡本の顔を見る。ショートの髪と、よく変わる表情。よく動く大きな目。身振り手振りで話す様は可愛らしい。こんな妹が欲しいと誰もが思うだろう。

一方、咲良を見ると、落ち着いた雰囲気、長い綺麗な黒髪。じつと相手の目を見て、優しい表情で話しを聞いてくれる。こんな姉が欲しいと誰もが思つだろう。

「おはよ、みんな」

角を曲がり、明るく挨拶をして来たのは、片平奈羽だ。

なんだ？ これ？ 彼女を見た瞬間、息が詰まつた。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね、寝不足？」

「うん。徹夜でゲームしてた」

なんか、泣きそうになる。

なんだよ、これ！？ やばい、本当に涙が零れる。

その時、後ろから慌しく走つて来る足音が聞こえた。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

息を切らして走つてきたのは、伊吹圭だ。

「伊吹……。ぜえぜえって擬音か？」

俺は涙を堪える為に適当な事を言つてみた。声に出して言う事で気分が晴れたのか、先程までの、あの異様な胸が詰まる感情は消えていた。

「何か面白い表現だね」

「あんたは、もう少し余裕を持つて行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

はあ、はあ……。俺は病氣だ。間違いなく病氣だ。

大体、岡本が超能力者つて、何の冗談だよ？ はて？ はて？

教室では騒がしく、雑談に華を咲かす。

クラスの奴に軽く挨拶をしながら進む。

「聞いた体育館のピアノの事？」

それは、不思議と耳に入つた。数多い雑談の中から、まるで、それだけが大声で話されたかの様だった。

「なんか、先生達が騒いでいたね」

俺は思わず立ち止まつた。ピアノと言つ单語に違和感を覚えたからだ。

「悠一？」

後ろから、伊吹が疑問の声を投げ掛ける。

「あ？ ああ、すまん」

俺と伊吹はクラスが同じだ。他の三人は、それぞれが別のクラス。俺と伊吹だけが同じクラスだ。伊吹の席は俺の三つ前なので、その進路を塞いでしまつっていた。

俺は自分の席に座り考え込む。

が、どうしても思い出せない。

それよりもだ。岡本の件はどう思つ? どうして、俺の知らない岡本の行動を妄想してしまうのだろうか? 普通の行動ならば、まだいいが、ちょっと、あれはまずいだろ……。やばい、鼻血出しきた……。

病気だろ、病院行くか。

いや、なんて言うんだよ？ 女子高生の私生活を妄想しちゃいま
すってか？ 死んだほうがマシだ……。

逆に正常ですかと言わねたら立た直れなしよな……。
最悪だぜ、机の中からは変な手紙は出てくるわ……。

「何これ！？ ラブレター！？」

。駄目だ。ノリがまるで岡本だ。

俺は少し、自分自身を見つめ直さなければいけない。

脣には金ある癖に岡本にたかられるわ……。少し言葉遣いも悪いな……。自分が今までどんな人間だつたかすら忘れてきている。完全に病気だ。

才。

つて、日本語になつてないよ！？。誰か助けて.....。

隣に更に立派な体育館が無ければ、こちらの倉庫が体育館かと錯覚してしまうだらう。などと、考えている暇はない。

この街は山々に囲まれた盆地にある。冬は寒く、夏は暑い。いや、夏の暑さは耐えられる。問題は梅雨の季節だ。湿気と高温、まさに熱帯雨林だ。遠くに大きな観覧車が見える。あれは、この豊里市名物「ジェット観覧車」だ。などと、考えている暇はない。人の気持ちというのはつづり易い。例えば、天気に左右された

りもする。天気が良ければ気分が良い、悪ければ、その逆。今の俺の気分も、この晴れ渡った天気そのもの。しかし、いつの日かその外的要因に左右されずに自分の内面の心情が反映される日もくるのだろうか？ それが大人と言うものだろうか？ ああ！ などと、考えている暇はない！ 手紙の送り主はどこだ！？

いた。彼女に見覚えはなかつた。尤も、同じ学校と言う事もあり、わずかな記憶の中にはあるだろつ、今はゆつくりと思ひ出す暇もない。

「あ、あの木村君、付き合つて下さい！」

うん。それなりに綺麗な人だ。髪は肩よりも少し長い程度、色素が少し薄い、抜いているのかな？ 肌の艶も良い、しつかり手入れされている。岡本とは大違つだ。

「あ、あの。もしかして、他に好き人いるんですか……？」

返答の無い俺に不安を覚えたのか、彼女は言つ。

「その前に名前。まだ名前聞いてないよ？」

「え？ 柳です。柳朋子です。中学の時から一緒の……。一年の時は同じクラスでした……」

しまつたあ！？ だが、そう聞いても名前と顔が一致しない。どこかで見たかもしれないといった程度だ。はて？

思い返して見ると、俺には友達も知り合いも、岡本やいつもの連中しかいない。もちろん、同じクラスならば、それなりに話すが、決してそれ以上にはならなかつた。なぜか？ と問われれば返答に困る。そうだつた、としか言いようがない。

「他に好きな人がいるんですね……？」片平さんですか？ やつぱり、私では敵いませんか……。そうですよね……。あの人は同姓から見ても綺麗な人です。何をやつても完璧で、先生からの信頼も厚くて。誰でも彼女の事を好きになっちゃいますよね……」

何を言つている……。

「ありがとうございます。奈羽の事を褒めてくれるのは悪い気がしない

これは俺の本心だ。

「今の言葉で諦めが付きました……。」*じゅりゅう*、はつきり言つてくれて、ありがとうございました……」

柳朋子と名乗った彼女は、そのまま走り去つてしまつた。
つて、俺はつきり言つたか！？ それよりも、どいつもこいつも「なうなうなうなう」つて、いつその事「ナウ教」でも作れ。でも、ナウ様か……。いい響きだ……。俺もナウ教に入るか……。

学食では既に他の四人がいた。いつもの場所だ。柱の裏の窓際。何らやら瞬間移動の話をしている。そういえば、岡本は超能力者なんだつけ？ そんな訳あるか……。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ」

俺は開いていた岡本の席の隣に座り言つ。

超能力雑談の中、岡本一人が険しい顔でエビカツサンドを睨み付けている。

まさか……。超能力でエビカツサンドを二つに分裂させるとかないよな……？ 止めてくれよ、そんなミステリー……。そんなにエビカツサンドが好きなら買ってやるよ……。いや、本当に分裂されるなよ？

「どうした岡本？ そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか？」

俺は怖くなり、冗談を口にした。

「え？ ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんである訳ないよ」

と、岡本が答える。

そんな事は知っている。余りにも好き過ぎて、人目もばからず超能力を使って、エビカツサンドを二つとか三つに分裂させないか心配なんだよ……。

放課後に何気に遠回りをする。校庭の外周には数多くのイチヨウの木が植えられている。大小様々で遠くから見れば、酷く雑然とし

た印象で、ただの雑木林だと思う事だろう。だが、利点もある。目
絵印として有効活用が出来るのだ。過去の先生の名前や生徒の名前
か不明だが、様々な名称がある「イルカの木」「アーシェタワー」
「信也スペシャル」「闇星一番」などなどである。その名を聞けば、
どの場所かすぐに分る。

奈羽だ。机を一段重ねにして運んでいる。

酷く重そうに見える。だが、赤場が小さく、チヨコチヨコヒシ
ずつ進む様は、非常に可愛らしき。少し、見ていいよ。

卷之六

俺は慌てて駆け寄る。先程の自分の思考を後悔する。奈羽は転んだまま俺を見て言つ。

「なんですか!!? やはりね……。悠一の仕業だよたんだ?」「

しまつた！！

「冗談だよ。でも、今、日和みたいなしゃべり方だつたね？」

せうとうじよへん、じゆうじよへん

俺は、時間と共に岡本になつて行く。自分でも酷く可笑しな事を言つてゐると思つ。まさか、これが奴の超能力か！？ それは、俺だけではなく、学校全体、いや、この街そのものが、既に岡本の超能力攻撃を受けているのではないだろうか？ 全員総岡本化……。俺の頭の中では「なんですよ！？」 「なんですよ！？」 と言つ言葉がグルグルと駆け回る。

現実逃避が止まらない身体になってしまった。

「エ、一、が、ニ、ド、リ、レ、一、」
「エ、ト、ジ、ア、」

俺は、そう言い。机を重ね持ち上げる。重い……。奈羽はこんな

重い物を運んでいたのか、可愛らしい

あけがとう 悠一は優しいね

奈羽が微笑んでくれる。それは、まるで親に褒められた時の感情

に似ていた。

昔からそうだったな……。俺達五人は家族みたいだと思った事もあつた。兄弟とか姉妹じゃなくて、家族だ。父親或いは母親が奈羽。長女に咲良、その下に俺。そして更に下に伊吹と岡本。呼び方も奈羽と咲良の二人は下の名前で呼ぶのも、多分、俺が一人に甘えているから。他人に泣き言など言わなが、奈羽と咲良には言えた。

「合唱部ね。明日から活動しましょう」

合唱部。奈羽が提案し、創部したものだ。

「へえ。もう活動できるのか。なんか、岡本とか伊吹がしぶってなかつたか?」

「大丈夫だよ。きっと氣に入ってくれる。私はそう信じている。悠一もきっと氣に入るよ」

奈羽がどこか夢見る様に楽しそうに言つ。そんな奈羽を見るのは好きだ。

「そうだな。そもそも、俺等五人で集まれば、なんだつて面白いよな」

「そうね。本当にそう……」

机を倉庫に片付け、俺達一人は旧校舎の前まで来る。

「日和、あ、悠一か……。ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしてね」

奈羽はそう言つと、旧校舎の中へと消えていく。

ちょっと待て……。今、俺と岡本を間違えなかつたか?
もしかして……、姿形まで岡本に似てきていくのか!? 僕の人生どうなるの!?

今日は朝から低調だ。自分自身に起きた事象について考察し、眠れなかつた。

この岡本の記憶はなんだろうか? ただ、細部に渡り、検証した結果、岡本視点での記憶と俺の記憶での矛盾点は見つける事は出来なかつた。

つまり、事実であるかもしない、と言う事だ。だが、それも俺が無意識の内に俺の記憶から導き出された予測であるかもしない。そんな訳あるか……。それでは俺が別の意味での超能力者だよ……。

それより、問題となるのは、思わず「岡本語」が出てしまう事だ。何度も両親やクラスメートを凍りつかせたかわからない……。

更に岡本視点での記憶の追跡は危険だ……。出血多量で死んでしまう……。

当然、その様な理由から岡本本人と俺の記憶との一致を確認する術がない。聞ける訳がない……。いつたい、何を言われる事やら……。警察を呼ばれるのはまだ許せるが、それが救急車であつたならば、俺のプライドはもう修復不可能だ。

気が付けば放課後だ。最近、どうも考え込んでしまう。

合唱部の活動初日。俺は旧校舎の一階へと向かう。

薄汚れた壁、ほとんど掃除がされてないであろう階段。隅には綿埃が溜まっている。

階段には各部の勧誘ポスターが貼つてある。オオクワガタ同好会つてなんだよ……。いや、それより庭部つてなに？ 俺の想像通りならすぐ楽しそうなんだけど。

あれだろ？ 庭に芝生敷いてさ、ビーチパラソル挿して、みんなでバーベーキューとかするんだろ？ なんかビニールプールとかも用意してさ？ ……。やばい、現時逃避がやば過ぎるよ……。なんか口調までおかしいよ……。

合唱部の前には既に咲良と伊吹が来ていた。岡本の姿は見えない。

「よつ。中入らないのか？」

「奈羽ちゃんがね。みんな揃つてから、入ってきてつて」

「岡本と一緒にじゃなかつたんだ？」

俺の挨拶に咲良と伊吹が答える。

「いや、知らないな……」

今は岡本の顔を正面から見れる自信がない……。

「悠君。何か悩んでいるね？ 私にならわかるから、いつでも相談してね」

咲良の言葉に驚く。まさか……。咲良も岡本の超能力攻撃を受けているのか！？

更に何か伊吹の態度も異常だ。居心地が悪そうと言つか、視線が泳ぐ。

「ああ……。相談するかもしない。その時は頼む、咲良俺は平静を装い、そう言うのが精一杯だ。

「うん。待ってる」

咲良が優しく言つてくれる。その時、岡本が暗い表情と、とぼとぼと、まさにその擬音が似合つ足取りでやつてくる。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入つてきて」「お前はもつと余裕持つて行動しろよ」

それぞれが、岡本に一聲掛ける。

「そちもわるよのぉ……」

「お前は悪代官か……。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

伊吹も乗るな……。

「じゃあ、行くぜ？」

扉の一番近くにいた伊吹が開ける。

よく油が挿されているのか、扉は音もなく聞く。光が広がる。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が満面の笑みで、両手を大きく広げ叫ぶ。

何か不思議な光景だった。幻想的。そう、幻想的だった。酷く現実感が消えていく。音も消えて行く……。

「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」「

奈羽が何か言っている。だけど、言葉として頭に入つて来ない。でも、凄く涙が出そうだよ……。

あたし、大事な事、忘れてる……。

「ここ、景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」「どれどれ？」

……。って、あたし！？ 嘘！？

はあ、はあ……。なんだ？ 僕はいつたい何の病気なんだ？ もう誰でもいい、救急車呼んでくれ……。

「気に入つて貰えたら嬉しいなあ」

「うん。気に入つた。ピアノも、その、かつこいいね……」

いつたい、この人達は誰と何の話をしているの？

呆然とする。

何か現実感が乏しい。

ゆつくつとしたメロディが聞こえてくる。そして、綺麗な歌声が流れる。

一番目の私は猫だった、我慢気ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかつた。

一番目の私は犬だった、猫さんが心配だつた夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目の私は兎だった、何もかもが不安だつた夢の世界、流れるままに朽ちていく。

四番目の私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目の私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだつた。

泣いていいよな……？

マジもつ無理。立つていられない……。

「悠……。そんなに感動する曲だつたか？」

「でも、ちょっと悲しい感じするかな」

「あたしも泣きそだよ……。うう……」

「ああ……。日和”ごめんね、泣かないで。大丈夫だからね、心配いらないよ」

奈羽が岡本を抱きしめている。

「あたし、歌うならもつと楽しい曲がいいよ。なあうう……」

「そうね。“ごめんね。私の配慮が足りなかつた。次は日和が好きそうなのを選んでくるね」

誰か、俺も抱きしめてくれ……。咲良……。いや、伊吹でもいい

……、お前で我慢する。

だが、岡本も泣いてよかつた。

部活も終わり、旧校舎から出る。

外は風も強く、流れる雲も早い。

驚く程に黒い雲とその合間から覗く、恐ろしく青い空。

既視感。それは、どこから来る思いだらう。

俺はこの光景を覚えている……。

俺はほほ、無意識に反射的に、岡本へと吸い込まれていく空き缶を伊吹よりも早く叩き落していた。

「え？」

伊吹がかすかに驚きの声を上げる。岡本に至つては空き缶の存在すら気が付いていない。

手の甲が少し切れた。少しづつ血が滲む。

誰も声を出さない。

「悠一？ 大丈夫？」

先に声を出したのは、ようやく状況を把握した岡本だった。

「あ？ うん」

傷が深いのか、血が一滴ゆづくりと地面に落ちた。

「ああ！？ 大丈夫！？」

俺は岡本に引きずられて保健室に連れて行かれた……。

俺は岡本に引きずられて保健室に連れて行かれた……。

保険室には先生がおらず、岡本に手当をされる。何気に上手だが、さすがに大袈裟だ。包帯までは必要ない。先程から酷く岡本の記憶が様々思い出される。

「 09 13 14 30 37 38 47 「

と、俺は呟く。ぴたりと岡本の包帯の巻く手が止まる。

「ふうん……。悠一にも予知あるんだ?」

「ないよ。これはお前が買った口トフの番号だ」

「何言つているの? あたしは五口買つてるんだけど?」

「他は知らないよ。これは、お前が予知した番号だ」

「よし。終わり! ありがとね、助けてくれて」

治療が終わり、岡本は元気よく立ち上がり背伸びをする。

「お前、それが原因で死ぬぜ?」

「何言つてるの?」

実際は口トフが原因だったか思い出せないが、凄く関連がある気がする。

「あ、今、予知きた。悠一のその予言外れるつて」「え?

「でも、心配しないで。当選金の悪用はしないみたい。全額、自然愛護団体のファリアスに寄付するはずだから」

岡本はにっこりと笑い親指を立てる。今まで見た事のない表情だ

.....

「この人は誰? 俺は誰? 岡本日和?」

「おなかすいたあ。晩御飯何かな? 悠一なら知つているよね?」

何か背筋が凍る。

「今ね、色々予知来たんだよ? 悠一が何者かわかつたかも? ふふ、先帰るね」

岡本が保健室から出て行く。

「ちょっと待てよ。お前誰だよ?」

「岡本日和に決まってるじやない? 何を今更?」

今まで、俺の記憶と岡本視点での記憶の食い違いは一つたりとも

なかつた。

だが、今日、始めて食い違つた。そつ、合唱部で奈羽の歌を聞いて泣いてからだ。

そして今まで、酷く身近に感じていた岡本が、別の人見えた。気が付くと、彼女の姿は消えていた。

昨日は全く眠れなかつた。いつたい俺が何をした……。そもそも昨日のあれはなんだつたんだ？ これも岡本の超能力攻撃か？ 何度も、病院に行こうかと思つた事か……。でも、本当になんて医者に言うんだよ？

実は俺、女子高生なんですってか？ 死んだほうがマシだ……。逆に奇遇ですね私もです、なんて言われたら立ち直れないよな……。いわねえよ……。

日日に現実逃避が激しくなる……。

最悪な事に合唱部揃つて生徒指導室に呼び出されるわ。何やら奈羽が熱心に語つていて。眠くなってきた……。ああ、奈羽の説教は耳に心地いいなあ……。なんでこんなに気持ちいいんだろうな？ 静かな感じなのに耳にすっと入る。一音、一音がちゃんとほつきりしていると言うか、一切濁つた感じのしない話し方なんだよな。決して棒読みではない、低音から高音の移行が凄いスムーズで……。それがぐるぐる……、る……。

「わかつた……。この件に関しては調査する。行つていいぞ」「やばい、寝ていた……。

昼食も一人で屋上に来てしまつた。

生徒もまばらだ。奥では数人の女子が楽しいそうに談笑しながら、弁当を広げている。混ざりたい衝動に駆られる。

屋上に大きな天体ドームがある。それは、酷く屋上からの景観を損ねている。

「天文部の様にあんな物を買わせるよりは可愛いか……」

と、一人呟く。もちろん、それは合唱部のピアノの事だ。いや、待て。あのピアノってベーゼンドルファだよな？俺の記憶が確かなら、相当高額なはずだ……。先生達も必死になる訳もわかる……。だから奈羽に目を付けられたのか、気の毒に。

校庭を見ると、木の下で大好物のエビカツサンドを食べている岡本が見えた。

「あいつ……。いつも信也スペシャルにいるよな……」

と、呟く。信也スペシャルとは、いつも岡本がいるイチョウの木の事だ。昔の在校生の佐藤信也があの木の下に大量のエロ本を埋めたのが始まりだ。その手の生徒が集いだし、大勢で読むようになり、いつしかエロ本の木、信也スペシャルと呼ばれるようになったとか、ならないとか？ 今だに大量に埋まっているとの噂もある。誰も近寄らないが、恐らくこの学校一有名なイチョウの木だろう。

「田和ちゃんのところに行かないの？」

いつの間にか隣に来ていた咲良の発言だ。咲良も岡本を見ている。

「なんでだよ？」

「うん？ 田和ちゃん元気なかつたから？ 可愛そうに……、あんなに寂びそうにしてるよ……？」

確かに、何か思い詰めているような気がする……。だが、昨日の岡本の態度が妙に心にわだかまる。あれは岡本だったのか？ 俺の記憶にあると岡本とは違かつた。そう、俺の中にある岡本視点の記憶と違うのだ。その記憶によると、俺は今から岡本の所に赴くはずだ。しかし、それでいいのか？ 単純に怖い、その一言に尽きる。

「心配じゃないの？ 田和ちゃんの事好きなんでしょう？」

「なんですよー？」

「しまったー！」

「あら？ 反応まで田和ちゃんにそつくり……。そこまで好きなの

ね？ 奈羽ちゃんに報告してこないとー！」

「だから、なんでよー？」

駄目だ、止まらない……。誰か助けて……。

「そ、それより……、咲良のほうこそ大丈夫なのかよ？ 頬色悪い
ぜ？」

「「めんね……。私は奈羽ちゃん一筋なの……。悠君じゅや駄田」

「ええ！？ 嘘！？」

俺の知らないところで世の中動いている！？

「本当に日和ちゃんと話しているみたい」

咲良に笑われた……。でも、咲良もそつまづつて事は、やつぱり、
俺は岡本和？

じゃあ、あそこでエビカツサンド食つている奴は誰なんだよ……。
まさか……、あっちが本物の木村悠一か！？ どんなファンタジー
だよ……。

いや、待てよ？ あっちが木村悠一だとしたら……、えっと、ちよ
つと待て！－

はあ、はあ……。この妄想はまずい……。危険過ぎる、ひとまず禁
止だ。

俺は俺を信用できないぜ……。

……。

信也スペシャル！？ やばい、止めないと！－

「ちよつと、様子見に行つてくる……」

「うん。日和ちゃんの事、お願ひね」

俺は咲良に言い、急ぎ階段を駆け下りる。

「ひ、一人で何やつてんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

俺は息を整えつつ叫ぶ。

「悠一……。あたし達、これからどうなるんだひづね？」

「え？」

やはり、俺の中にある岡本の記憶と違う。それとも、これは俺の
妄想だったのだろうか？ いや、でも、これは想像の範疇を超えて
いる生々しさがある。

そう、記憶ではなく、感情、思い、痛みを伴いながら、それを体

験しているかの様な生々しさなのだ。

「ずっと、みんなで一緒にいたいよ……。夏には海行ったり、花火したり」

死亡フラグ！？ 今度はお前か！！

「いれるか、俺等ガキの頃から一緒にだったろ？ これからも変わらないよ」

とか言つたら確定！？ あれ！？ 心の声が出ちゃつた、ビリしよ！？

「うん。そうだといいね。でもね、不安なんだよ。色々とね」

岡本？

「色々考えるんだよ。昨日、悠一の予知外れるつて言つたの、嘘かも」

え？ 明後日、岡本が死ぬ？

「不安なんだよ……。奈羽も圭も咲良も変だし。あ、あんたが一番変か。悠一もあたしの口調真似するの止めなよ」

真似てはいけない……。出でしまうんです……。

「それは、気をつけます……。でも、岡本がそんな事、考えているとは思わなかつたよ」

わからない……。この岡本はどう見ても岡本だ……。じゃあ、俺は誰なの！？ いや、だから木村悠一だろ……。

「それは考えるよ。怖くて、怖くてしようがないよ」

なんだろう？ 素直？ 俺の時は妙に意地張つていたような？

やっぱり、この子誰？ 内面まで岡本になってきた……。

「誰か助けてよ……」

岡本が震えている……。もちろん芝居には見えない。去来する思いは同情だろうか？

「安易に大丈夫だ、とは言えない状況だけど。俺がなんとかするよ。俺が、木村悠一なのか、岡本日和なのか、もはや分らない。だが、今、目の前にいて、震えている岡本を放置する事は出来ない。その気持ちも、俺の物なのかあたしの物なのかも分らない。」

……。常識が邪魔をして前に進めないよりはいい。

俺はあたしだ。

状況を整理しよう。明後日、岡本日和が死ぬ……。なんで？ なんでだろう？ 記憶が曖昧なんだよね。なんか布団に入つて夢を見ていたら死んでた？ そんな事あるか……。もしかして病死か！？ なら、どうしようもないね。諦めろ、岡本日和。

いや、よく思い出せ……。何かあるはずだ。岡本つて頭悪いからなあ、記憶力までない。どうやって、この高校入つたんだ？ ああ、思い出した、なんとなくわかつたんだ、問題。本当に超能力者かよ……。そういえば、奈羽と咲良は凄い頭いいけど、圭つて頭悪いよね。あれも超能力者？ や、現実逃避も程ほどにして下さい……。思い出した。今日、放課後に誰かに付けられていた。尤も、多少の記憶違いがあり、実際に起るかはわからない。

だが、もし誰かが付けており、その人物がわかれれば一步前進かもしれない。

俺は放課後に岡本を待ち伏せする。

来た。ペタペタ言いながら歩いている。

俺はヒタヒタと足音を殺しながら追跡する。ヒタヒタ？ 变な擬音。

夕日が綺麗だ。薄いオレンジ色の空に、夕日に照らされた濃いオレンジ色の雲。角を曲がり、夕日を背にして、影が伸びる。少しづつ、少しづつ、影が伸びて、俺の前を歩くようになる。彼は俺よりも歩くのが早い。俺も負けじと歩を早める。少しでも彼に追いつきたい。だが、どこまで行つても追いつけない。どうして、君はそんなに歩くのが早いの？ 元々君と俺は一人の人間だったじゃないか……。

……。つて、気が付けば岡本が目の前にいる！？ 現実逃避も程

ほどにしないと……。

どう考へても気付いているよね？

あれ？振り返らない……。声を掛けようかな？岡本？もし
かして泣いてる？

いや、ちょっと待て……。他に人影はない。

そういえば、俺、結構足音殺して付けてたよね？ヒタヒタって
？ヒタヒタ？

もしかして、後を付けていたのは俺？

なあんだ。よかつた……。よくないよ！うん？誰も付けて
無かつたんだからよかつたじゃん。ああ、そつか……。いや、俺が
付けていた事には変らないから、よくないよ。じゃあ、どっちよ！？
でも、可愛そつだから、声を掛けよう……。
……。いない……。

ただ時間が過ぎて行く。ここ数日睡眠不足だつたせいか、昨夜は
よく眠れた。

人間、割り切れば落ち着く。俺はあたしなんだから。それでいい。
今日の岡本の予定はなんだつただろ？

全く思いだせない……。思つたけど、これは俺の記憶力が悪いの
ではなく、岡本人が覚えていなだけではないだろ？

お昼にみんなでお昼食べました、嬉しかったです。なんて日記が
見えるぜ……。

学校帰りに奈羽と手を繋いで帰りました、嬉しかったです。と言
う日記も見えるぜ……。

「悠一。奈羽とか知らない？」

昼食時間に手に大量の菓子パンを持つ伊吹に話しかけられる。お
前、いつもラーメンじゃなかつたか？

「ああ、多分、信也スペシャルにいるよ。行くか？」

「おう、腹ペコだ」

信也スペシャルに行くと、予想通り岡本、咲良、奈羽の三人が並
んで食べていた。

「今日は、お揃いか？」

俺は声を掛ける。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう?」

と、奈羽が優しく誘ってくれる。俺と伊吹は三人の前へと座る。「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」「あれ? 元々合唱部の物じゃなかつたの?」

「あんたは、何で昨日生徒指導室に呼び出されたと思つてゐるよ……。合唱部の物の訳ないでしょ……」

と、伊吹の質問に奈羽ではなく岡本が答える。

「じゃあ、なんで部室にあるんだよ?」「さあ? 神様がくれたんでしょ?」

「そんな馬鹿な……」

「それはね、トリックがあるの。咲良も言つてたよね? 偶然なんて有り得ない、全ては故意の連續により起きた必然つて。つまり、故意の連續の一番最後に私が割り込んだの。私はただ一言、旧校舎二階の一番奥です、って言つただけ。詳しくは言えないけどね」

奈羽は人差し指を立てて自慢げに話す。

奈羽に関しては、何をやっても不思議ではない……。気にしない事だ。

「みんな知らないと思つけど、奈羽ちゃんはね、天才なんだよ!」
知つてゐるよ……。

「えつへん」

威張るな……。

「はい、はい……」

「もう、日和もお、褒めてよお」

なんか、奈羽が岡本に抱きついている……。

「放せ、恥ずかしい……」

「咲良あ、日和が冷たいよ」

今度は咲良に抱きついている。

「冷たいねえ、私だけは奈羽ちゃんの味方だよ」

「奈羽、俺の所に來い」

伊吹が両手を広げている……。

「あんたは、もつ、それ犯罪……」

あれ？ なんか凄い楽しそうなんだけど？ 僕の時とは随分と違う。

笑い声が絶えない世界。なんだか……。この寂しさ……。

何か色々と考えてしまつ。どうして、俺はこんなに考えてしまつんだろう？

放課後、行く宛てもなく歩く。

どうして、こんなにも心が折れそうになるの？

さつきまであんなに晴れていた空は、気が付けば曇り、今にも雨が降りそうだ。

俺は公園のベンチに座り空を眺める。

それは、俺が大人ではないから、この空の景色に影響されて、これ程落ち込んでいるだけだろうか？ それとも、本当に落ち込んでいるのかな？

でも、どうして、あの岡本日和はあんなに楽しそうだったの？ あたしと何が違うの？

別の人だから？ あれは別の人なんだよね？

じゃあ、あたしが岡本日和に戻る為には邪魔なんだよね……？

「俺は何を考えている……。勘弁してくれよ……」

よく考えてみて。昨日後を付けていたのは、あたしだったよね？

じゃ、もしかして、あたしを殺すのもあたし？

「嘘だろ……」

だって、お家でお布団の中で殺されたんだよ。どうやつて？ 家族もいるんだよ？ 無理だよ、絶対に見つかるよ。家族か家族と同じ様に家の事なんでも知つていないと。ううん。あたしじゃないと無理だよ。

「もう、止めてくれよ……」

多分、殺して身体乗つ取つたんだよ。あたし超能力者だったよね

? 知らない能力もあって別の自分を作り上げるとかも出来たんだよ。だから、今度は今の岡本日和を殺せば、もう一度岡本日和に戻れるんじゃないかな? 出来るよね? 全部知っているし。

「頼むよ……。止めてくれよ……。俺は誰なんだよ……。おかしいだろ……。なあ? 誰か助けてくれよ……」

涙が止まらないよ……。頭の中で勝手にしゃべるなよ……。教えてくれよ……。俺は木村悠一か? 岡本日和か? どっちなんだよ。

その時、ふわりと何かが振ってきた。柔らかい何が……。

どこかで感じた事がある……。そう、これは人だ。

「悠一、大丈夫だよ。心配いらなによ……」

優しい声。

片平奈羽だ。

俺は奈羽にしがみついて泣いた。声も無く、ただ、泣いた。

「少し長話になるかも知れないけど、我慢して聞いてね」

彼女はゆっくり話しだした。

「私達五人つて凄く仲がいいよね? 何も言わなくても、お互いの気持ちがわかるくらい仲がいい」

奈羽の身体、凄く温かい……。

「家族みたいな感じで何も言わなくていい。鳥は飛ばなくともいいのなら飛ばない。疲れるからね。私達も同じ、しゃべる必要がないならしゃべらない」

凄くいい匂いだ。多分、何かの花?

「でもね。それは自分だけ。相手の事を考えていiable、自分勝手な行動なんだよ。相手は不安なんだよ、気持ちがわかつていても不安なんて心地いいんだろ? ……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すごくゅっくり。

「ちゃんと思いを伝える事で初めて安心出来るんだよ。気持ちはわかつっていても、言葉がないと疑心暗鬼になる。不安が募り、別の思ひが生まれ、いつしかそれが真実になる」

凄く耳に心地いい、ゆっくりとしたイントネーション。

「確かにわかつていい事を改めて口にするのは無駄だと思うかもしれない。でもね、それは意味を伝える為に言つんぢやないの。安心させる為、信じて貰う為の、大事な人への最低限の義務なんだよ。思いを伝える事を疎かにしないで」

いつの間にか奈羽は俺の顔を両手で優しく包んでいた。

「ごめん。何言っているか、わからないよ……。でも、でも、ありますがどう……」

「うん。そうね……。でも、ちゃんと言えたね」

「言つよ、なんでも言つよ……」

「うん。さて、帰りましょ。雨降るから」

そう言つと、まだしがみつく俺を引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し伸べる。

俺は反射的にその手を掴んだ。奈羽は優しく微笑んでくれる。

先程までの岡本の声は消えていた。もう夜と言つてもいい暗さだ。でも、これ程寂しい景色の中でも寂しさは感じられなかつた。

女の子と手を繋いで歩く。それは、通常照れなどがあるだろうが、今の俺にはない。

それは、迷子だった子供が母親に出会え、手を引かれている心境だろうか？

ただ、安心できる。

思い出せば、岡本の時もそうだつた。奈羽は身体は小さいのに大きい、俺より頭一つ小さいのに、遙かに俺より大きく見える。ずっとこのまま手を繋いでいたい。しかし家に着いてしまつ。「到着。相変わらず立派なお家だね。雨降るし帰るね。また明日」

「うん、ああ、ありがとう……」

俺は呆然と奈羽を見送る。

しかし、奈羽は本当に何者だろう？普通ではないという事は感じる。今、俺の胸にあるのは、ただ、彼女への尊敬と憧れ。女性としてではなく人として。

「そう言えば、岡本語が消えているな……」

だが、岡本日和だつた記憶は変らずある。しかし、俺が木村悠一として、明確に俺は俺としてここにいる。不思議な気持ちだ。

岡本が学校を休んだ。ここは岡本の時とは少し違うが、やはり、昨日同じ事があつたのだろうか？ そう、自転車と接触し、肩を怪我した事だ。

冷静に考えると、あれはれつきとした岡本日和だろう。俺と違うのは、ほんの少し素直であつた。ほんの少し大人であつた。ただ、それだけだろう。それだけの事でこれ程別人に見えてしまつ、人間の可能性に驚く。

ならば、今日岡本が殺害される可能性は高い。だが、昨日の考察も説得力があった。「あたしを殺すのもあたし」の事だ。事実、誰がどのようにして？ の問いに対し、明確な答えを提示出来るのは本人である岡本日和だけであろう。動機に関しても昨日の考察「身体を乗つ取る」でクリア出来る。

そんな馬鹿な……。それは、後付けで説明しているだけだ。事象に対して、そうでなければ説明が付かない、と言つてはいるだけで、事実とは限らない。

どうする？ それでもこの考えは払拭できないぞ？ 一昨日の尾行と同じく、何等かの突発的偶然が重なり、岡本を殺害してしまうシナリオの可能性は否定できない。

俺が動く事で岡本が死ぬのか、動かない事で救えるのか？ どつちなんだ？

無為に時間が過ぎ放課後になつてしまつ。

時間がない。岡本の殺害の正確な時間は不明だが、少なくとも日は暮れていた。

俺は迷いつつも岡本の自宅に足を運ぶ。

裏山に回り監視するか？ 裏山ならば岡本の部屋が見える。

「覗きかよ……」

少し、自嘲してしまう。それでも、岡本日和が心配だった。

怯えていた、そう、あの時の岡本日和は怯えていた。どうしようもなく不安だつた。それを取り除いてやりたい。そう思う。

陽の明るいうちは人目につかないように奥に行つてこよう。

頂上に近い場所に比較的、平坦な広場がある。

子供の頃にみんなで秘密基地を作つた場所だ。

「懐かしいな……」

広場には秘密基地の形跡は跡形もなかつた。当然だらう。少し、周辺を見て回る。

この先に、縦穴がある。大人の背丈よりも少し深い位だらうか？

岡本が落ちて大変だつた事がある。どうやっても登れずに、俺が下に降りて肩車したんだっけ。でも、それでも登れず、俺も登れず。咲良が手を伸ばしている内に転がり落ちて怪我するわ、大変だつた。なぜか、伊吹も穴の中にいるわ……。あれ？ どうやって出たんだ？

「奈羽は何してた？」

「いないはずはない、子供の頃は特に俺達は奈羽を中心にしていた。奈羽がいなければ俺達は集まらなかつた。

そうだ、奈羽は二ヶ月程、遠方の親戚に預けられていた時期があつた。その時か……。じゃあ、なんで俺達は奈羽無しで集まつたんだ？ 学校など、その関連以外で俺達は一緒にいる事はなかつたよな？ 特に中学に上がるまでは、お互い嫌いあつていた様な気もする……。俺達が喧嘩していると奈羽が泣くから、仲良さそうにしていて、気が付いたら本当に好きになつていた……。不思議だ……。思い出せない、保留だ。

既に辺りは暗闇に包まれていた。

俺は岡本の部屋が見渡せる場所まで来る。これ以上は近づけない。万が一にも俺が犯人であつてはいけないからだ。かと言つて、ここを離れる事も出来ない。ここが俺の引く、引かないの限界点。不気味な静けさだ……。

遠くでは犬の鳴き声が聞こえる。

そして鈍い音。

鈍い音？ そう言えば、岡本の時に気になっていた音だ。あれは、
夢ではなかつたのか。

なんだろうか？ マットの様な物を叩く音に似ている。
秘密基地があつた広場の方角の様な氣もする。

怖いな……。

俺はゆっくりと広場へと歩く。

静かに、いつも身を護れる様に警戒しながら。
護身用の武器の一いつや二いつ持つてくるべきだつた。
どうして、頭が回らなかつたんだ……。

結局、俺は俺を信用していなかつた。

自分かもしれないと言ひ思ひが先行しすぎていた。
無意識の内に他の可能性を否定していた。

致命的だ……。

後悔……。

もう何も見えない……。

…………。

でも、俺じやなくてよかつた……。

…………。

第三章（1）

第三章 宮原咲良の場合

頭が痛い……。何かで殴られたようだ……。
俺は布団から抜け出す。

裸だった……。まあ、それはいい……。だが、どう見ても女だ……。

クラシックが聞こえる、オーディオからだ。少しずつ、記憶が鮮明になる。

「ラフマニノフ、ピアノ協奏曲第三番第一楽章」

私はこの旋律で目覚める。

そう、私はエリザベス。エリザベス・リッテンハイム……。

私は真冬以外、寝巻きを着用しないで睡眠を取る。シルクの肌触りが非常に心地いいから……。

さて、状況の確認をしようかしら。今、私の頭脳には岡本日和、木村悠一、双方十五年分の記憶がある。そして重要なのは、更にこれから異なる五日間の記憶もある……。

木村悠一は大きな思い違いをしていた。単に、これは他人の記憶を覗き見してしまった、と言うような生易しい物ではない。異なる価値観、異なる性別。そして、感情、思い、痛み、それら全てを理解しうる訳もない。

そう、これは生まれ変わりなのよ。私達三人は同一人物。

同一時間軸に前世と来世が混在する。それが眞実。

記憶を引き継がなければ、それでも問題はないのだけれど、引き継がれてしまった。つまり、未来の出来事が見えると言つ意味をも内包する。

なぜ、そうなったかは、今のところ一つしか思い当たらぬ、岡本日和が死にたくない、と強く願つたから。だから、彼女の死の五

日前に記憶が戻った。往生際が悪いはね……。にんにん……。

次に犯人は誰かの考察に移りましょうか。

当然に身近を疑うのがセオリーでしょうね。岡本日和はともかくとして、木村悠一の殺害に関してだけは無理がある。なぜ、あのタイミングでの場所にいたの？

つまり、ある程度の予備情報を持っていた人物。非常に身近だと言つ事の証明。

ならば、疑うべきは二人、片平奈羽と伊吹圭に絞られる。その手口は非常に狡猾で残忍。知能の高さも伺える……。全ての状況が一人の人物を指す。

片平奈羽しかいない。

フフフ……。岡本日和は論外にしても、木村悠一では太刀打ち出来ないのも道理。片平奈羽の実力は拙者が一番よく知っている……。正面から戦えば私ですら勝てるがどうか……。片平奈羽……、奴はこの地球が生んだ怪物よ……。

しかし、今の私にはアドバンテージがある。が、不安要素もある。アクティブに動き過ぎれば、未来は変化しアドバンテージは消える。極力未来を変えない事が重要だが、それでは制約が多くすぎる……。多少ひいき目に見て、互角かわずかに私がリード、と言つたところかしら？

いいでしよう、戦いましょう。相手にとつて不足はない。

フフ、私は負けたいと思っているのかもしれない。幼少の頃より私の上を行く存在だつた彼女と全力で戦いたい……。そして、私の想像の遙か上を行く姿を見たい……。そう思つてゐるのかもしれない……。

ふう……。朝から盛大に現実逃避しちやつた……。昨日見た推理ドラマとか時代劇の景況かな？ でも、凄いねえ、どうして、こんな事思いつくな？

エリザベス・リッテンハイムの時は笑いそうになつたよ！ 私は宮原咲良だよ！

もしかして、日和ちゃんの影響かな？　だよね。でも、奈羽ちゃんが犯人ねえ……。ないない、奈羽ちゃん大好き。

となると……。犯人は私が！？　まさか自分だって思わないよね。自分でも気付かない本性……。自分が怖い……、金持ちが憎い……。つて、お前は日和ちゃんか！？　私って天才！！　あれ？　これはどっち？　あ、日和ちゃんも悠君も言つてたね！

ふう……。少し真面目に生きようかしら……。

岡本日和、あなた個性強すぎよ……。そう言えれば、集団で隔離すると、一番個性の強い人に性格が似てくるって言うよね。日和ちゃんに似てくるのは仕方ない事か……。

まあ、さつきの考察も適当に思いついたものを並べただけだけど、真実も多分に含まれているかな？

片平奈羽ね……。あの人は無いかな、彼女なら命を狙うどころか、命を掛けて守るでしょうね。それは、過去の言動からも証明されている。私達は彼女にとつて真の意味での家族。幼い頃に両親を亡くし、祖父母に育てられた彼女は両親、兄弟、子、それが、どういったものか知らなかつた。だから想像した。彼女にとつて私達五人は、彼女が夢見た理想の家族像なのよ。現実離れし過ぎていて誰も気付かないけどね。私も奈羽ちゃんの期待に応える為に必死に長女を演じた。奈羽ちゃんの事は好きだつたし、尊敬もしているからね。

次に伊吹圭ね……。彼とは十年来の付き合いだけど、今だにどの様な人物か把握できていはない。言動から思考が非常に読みにくい。まつ、日和ちゃんの「何も考えていない」って推察を支持するけどね。でも、それにしほ、不可解な行動も目立つ。彼はいつもいるのだ、自然とそこに立つのだ、最も危険な場所に。他人からすれば、間抜けな人、運の悪い人に映るけど、彼がそこにいる事によつて、私達はそこへは行けない。つまり、私達は知らず知らずのうちに彼に守られていた。

考え過ぎかしら……。

第三者を疑うべきね……。

朝から妄想激しいよ……。三〇分くらい頭使つた気がするよ……。

私は朝食を取り、制服に着替え登校しようとする。

リビングでは相変わらず父が寝ている。彼はいつもこうだ。仕事と、その関連の接待が忙しく、まともにベッドで睡眠を取らない。いつから忙しくなり家庭を顧みなくなつたのだろう。

小学校低学年？ その辺りかな。それ以前は家族三人で遊んだ記憶で溢れるが、それ以降は奈羽ちゃん達五人の記憶に差し変わる。

「行つてくるね。お母さん」

「いつてらつしゃい、咲良」

私は軽く、そう言い家を出る。

まず、私は何をしなければいけないのだろうか？

前世である、彼等二人に打ち明ければ解決する問題ではない。まづ、それぞれ来世の存在を知らなかつたのだから、打ち明けるだけで未来は変化する。

犯人を捕らえる、または最低限、一人を生存させる。その為にはやはり、極力未来の変化は避けるべきだろう。私の強みは未来を知つてゐる、この一点だけなのだから。

つまらない授業、つまらない日常。つまらないクラスメイト。つまらない人生。

私にとつて、奈羽一家の長女「咲良」が唯一の生甲斐かもしけないね。

さしあたつて、丁寧に前世での記憶をトレースね。

当然ながら、岡本日和、木村悠一の記憶しかない。そう、問題は、「あの時、私は何をしていた？」という壁に当たる。嫌な予感がある。宮原咲良は何か悩み、または問題を抱えていた風に見えた。今、宮原咲良になつて見てわかる。彼女はそんなに弱くない。この様な問題を抱えていても至つて平静だ。

考えはまともないけれど、私の知らない私の行動を考えてみて

も答えはでない。

私が私として行動を行えば、それは前世世界での私の行動に一致すると樂觀するかしかないようね……。

まずは、犯人の特定ね。犯行現場の下見に行ってみましょーか。

放課後に私は岡本日和邸の裏山へ向かつた。

そうそう、ここは日和ちゃんの家の土地だつたね。すっかり騙されたよ。

「咲良あ！」

誰かに後ろから襲われた。

うん。この声は奈羽ちゃんだ。日和ちゃんまでいる。

「奈羽ちゃん？ 日和ちゃんもどうしたの？」

「咲良あ」

私の背中で何かしている……。

「奈羽が懐かしいから寄つていいって。咲良も？」

ちょっと待つて。日和ちゃんの時つて、こんな事あつた？

「あ、うん。秘密基地どつなつてるかなあつて」「

あつたかもしれないけど、思い出せない。日和ちゃんの時の記憶つて曖昧なんだよね。凄く頭が悪い。びっくりするほど頭が悪い。三歩歩くと忘れてしまつ……。意識が飛ぶといつか無意識に行動してこうるというか……。お前は歎か！――

。 。 。

「咲良あ、こっちだよお」

いつの間にか、奈羽ちゃんが、遠くで手を振つている。なんだろう

う~

「どうしたの奈羽ちゃん？」

「みてみて。落とし穴まだあるよ

「ああ、昔、みんなで落ちたねえ」

日和ちゃんも来て言った。

それは、一メートル程度の縦穴。落ちたら大人でも登るのは厳し

いかな。

「懐かしいね。みんなで落ちて大変だったよね」

奈羽ちゃんが言つ。

「そつそつ。圭がまぬけでねえ。あいつ、なんで落ちたんだろう? 何か一人で話してる。それより、日和時代の私つて、ここで何してたんだろう? 何か大事な事言つてたようなあ……。何を? 思い出せない。

「あれはね。そことのこが崩れそうになつてたから慌てて降りたんだよ」

「へえ?」

「まづいわね……。未来が変わる。何をしていいのかわからない。

「それえ。日和とつてこいい!!」

あ、奈羽ちゃんがボール投げた。

「あたしは犬か! ?」

不平をいいつつ日和ちゃんが走る。かわいい。

「咲良」

「うん? 何、奈羽ちゃん?」

「多分。咲良が一番辛いと思つ」

「奈羽ちゃん?」

「でも、咲良が、それを乗り越えないと私達に未来はないから意味不明。彼女の横顔が何か悲しいそつ……。

「私は何もしてあげれないけど、頑張つてとしか言つてあげれないけど……」

「今度は奈羽がとつてこおい!!」

今度は日和ちゃんがボール投げる。

「ひどいよ、日和い」

奈羽ちゃんが走る。

不可解な事が多い。

私は夕日の中、二人が明後日の方向にボールを投げあうのを見守る。

低調ね。収穫はなし。

家に着くと、父がまだリビングで寝ている。
珍しいね。こんな時間に家にいるなんて……。

「ただいま。お母さん」

キッチンにいる母に言ひ。

「おかえりなさい。咲良」

明るく返事が返つて来る。何か上機嫌。お父さんがいるからかな?
「お父さんどうしたの? 珍しいね」
「ね。体調悪くて、会社をお休みしたのよ
「具合悪いの? あんなところで寝てて大丈夫?」
「うん。起こしても、全然起きないのよ。咲良、言つてあげて」
「この時、感じるのは違和感。ただ、それだけだった。何かおかしくない?」

リビングの父を見る。おかしい。何かがおかしい。

「お父さん?」

私は声をかける。返事がない。

「お父さん、寝てる?」

もう一度声を掛ける。返事どころかピクリとも動かない。なぜか、
動悸が早くなる。嘘でしょ……。

「お父さん、起きて」

私は父の身体をゆする。ゆらすとテーブルに伏していた父がソファーに倒れる。それは、何か木で出来ている人形かのような硬い動きだった。リアリティのない動き、人には見えない動き……。

これは紛れもなく、死んでいる。

「お母さん! お父さんが……!」

私は叫び振り返ると、そこには穏やかに微笑む母がいた。心臓が止まりそう。信じられない……、なんなのよこれ?

「咲良? どうしたの騒いで……」

何か母の目の焦点が定まっていない。宙を泳ぐ目が何か常人のそ

れとは違つ。

「お、お父さんが、死んでる……」

私は声を絞り出す。

ガツン。

それは、自分の頭から聞こえてきた。足元には包丁が落ちている。背筋が凍る……。包丁を投げつけられたとわかるまで、どれ程時間を要しただろう。私は、おそるおそる、頭に手を伸ばす。そして、触り、その手を見る。切れではない、恐らく、刃の部分には当たらなかつたのだろう。

「咲良。お父さんに死んでるなんて言つたら失礼でしょ？」

「だつて、お母さん……」

もう、言葉もない。思考が停止する。

バチン。

今度は私の頬から音がする。なんだろう？ 平手？

「咲良、あなたには人の痛みがわからないのー？ 生きているのに死んでる、なんて言われたらいどう思つの？ 傷つてしまふ……。お父さんに謝りなさいーー！」

凄い形相で怒鳴られる。胃から何かが込み上げ、喉を焼く。母に髪を掴まれ、座らせられる。

「謝りなさいーー！ 謝りなさいーー！」

私は何度も床に頭を打ち付けられる。

もう、これはまともじやない……。私も頭おかしくなりそうだし、死んじゃうそうだよ。

「ぐ、ぐめんなさい」

私は力なく言つ。

「うん。よくできました。ああ、お夕飯にしましう。着替えていらっしゃい。あなたも、早く起きてくださいね、片付きませんから。母はいつも上機嫌にキッキンへと消える。残される、私と父の死体。何も考えたくなかつた。ただ、自分の部屋にゅっくつと歩く。

あまりの出来事に言葉も出ない。警察に通報しようと。私は携帯電話に手を伸ばす。

ちょっと待つて。前世一人の記憶では咲良の父親が死んだ事は知らなかつた……。つまり、私は通報していない……。どうして？母が怖かつたから？ 確かに怖いけど、どこか精神を病んでいる印象で、治療が必要だと思つ。尙更警察への通報が必要でしょう。では、なぜ？

……。

答えは一つしかない。前世の記憶のトレースの為。前世世界での宮原咲良が通報しなかつたから、通報しない。

嘘でしょ……。耐えられるの咲良？ いや、耐えたんだよね……、私は。頭が自然と冷静になり、覚悟を決める。

うん。このまま父が生きていると想つて行動しよう。

命が軽いものだなんて、決して思わない。それなら、死者への礼節は？ あのままにしておくの？ 母はどうするの？ もう、普段の言動も成人のそれとは違う。喜怒哀楽が凄まじい。至急に保護が必要だと思うけど、なら、日和ちゃんと悠君はどうするの？ あのまま死なせるわけにはいかない。

答えは出ている。私は自分の両親よりも日和ちゃんや悠君の命を優先した。

ただ、そこで問題。優先したにも関わらず、二人は殺された。つまり、私は失敗している。いつたい、私はどこで、何をしていたの

……。

私は旧校舎の階段をとぼとぼと登る。そう、合唱部の活動初日。階段の壁には各部の勧誘のポスターが貼つてある。メジャーなものからマイナーなものまで多岐にわたる。オオクワガタ同好会つて何よ……。それより、庭部つてなんだろ？ 私の想像通りなら、楽しいしそう。あれだよね？ ベランダとか小さなスペースでも育てら

れる家庭菜園とかしてゐるんだよね？ ニードマートとか。レンガとかでちょっとした庭つくつちやつたりして？ ああ、いいね。小さな噴水とかも樂しそう。……。岡本日和さん、もう勘弁して……。

一階に上ると話し声が聞こえてくる。奈羽ちゃんと圭君の声。なんだら？

「あのまま放つておくのかよ？」

「見てる事しかできないよ、圭」

「それには同意できない。放つておいた結果があれだら？ てか、奈羽は何考えてるんだ？」

「別にそれほど重要なことではないよ」

「本氣かよ？ みんなの命が重要じやないと言つてんのかよ？」

「俺はお前の敵にまわるぜ？」

「圭がそうしたいのなら、構わなによ」

「ああ、やつせせて貰う」

「なんか、二人が喧嘩している……。初めてみた。

「残念だね。そろそろ咲良がくるよ」

奈羽ちゃんの声を聞いて、私は歩き出す。

「咲良あ」

奈羽ちゃんに抱きつかれる。

「なんか喧嘩してた？」

思わず言つてしまつた。心配だつたから……。奈羽ちゃんと圭君が私を見る。

「ううん。してないよ？ ね、圭？」

「あ、うん」

奈羽ちゃんの言葉に圭君の視線が泳ぐ。嘘がへたな人ね。敵とか命とか言つてたよね……。凄く気になるけど、聞ける雰囲気じやないよね……。

「ふふふ、部室凄い」とになつてるんだよお

知つているわ、大きなグランドピアノがあるんでしょ？ でも、どうやって強奪したのかな？ なんか故意の連續の一番最後がどう

とか言つてたような……、はて？

「驚かせたいから、みんなが来てから一斉に入つてきてね」

「うん、奈羽ちゃん。言つておくね」

確かに一人に言つるのは、私の仕事だつたね。奈羽一家の長女咲良。切り替えないと。奈羽ちゃんは教室の中にこつそり入つていぐ。そんなに見せたくないのかな。

それより、今の時間を利用して聞いておかないと。

「本当は喧嘩してたよね？ どうして？」

「別にお前には関係ないよ。心配するな」

私の問いに間髪をいれず、圭君が答えた。それは、予想されていたかのようだ。

「関係あるよ。心配して悪いの？」

「お前はお前の事だけ考えている。俺がなんとかする。奈羽には……、気をつける。これは言いたくはないけどな」

また、間髪をいれず、彼が答えた。このレスポンスはなんだろう？

「よう。中入らないのか？」

悠君が現れた。

「奈羽ちゃんがね。みんな揃つてから、入ってきてって」と、私が予定された言葉を言つ。

「岡本と一緒にじゃなかつたんだ？」

「いや、知らないな……」

それから、日和ちゃんが来てからも、私の記憶通りの会話が続く。私は予定された役をこなす。そして、綺麗な歌声が聞こえる。奈羽ちゃんの歌。

一番目の私は猫だった、我儘気ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかつた。

一番目の私は犬だった、猫さんが心配だつた夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目のは私は兎だった、何もかもが不安だった夢の世界、流れるままに朽ちていく。

四番目のは私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目のは蟻だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだつた。

意味深な歌詞ね。我儘気ままに生きて夢の世界……まるで田和ちゃんね。

……。
ちょっと待つて……。これって私達五人の事を言つてるんじゃないの？

一番目が日和ちゃん？ 一一番目は……、日和ちゃんを心配している？ 悠君？ ジャあ二番目は私……？ 流れるままに朽ちていくつて嘘でしょ……。そして、問題はこの先もある……。四番目と五番目……。奈羽ちゃんと圭君？

前世ばかりに田を向けていたけど、来世もあるつてこと？

この全員が同一人物！？

だとすると、全ての会話が繋がる。

さらには、五番目の歌詞の内容……。みんなに不幸を振りまいて。つまり、五番目が犯人？ 奈羽ちゃんか圭君が？ 「奈羽には……、氣をつけろ」さつきの圭君の言葉。

奈羽ちゃんが五番目にして殺人鬼！？

信じられない、信じない。何か裏がある。きっと、そう。圭君の勘違いかもしれない。

もう、気持ち悪くなってきた。眩眩がする……。
ひどいよ、こんなの……。

第三章（2）

冷静になれ。

帰り道。私は考える。状況の整理をしよう。

片平奈羽の作った歌は、私達5人を指している可能性が高い。数、順番、内容。こんな偶然が有り得る訳がない。いや、偶然そのものが有り得ない。その仮定が正しければ、片平奈羽と伊吹圭は私達の来世。

じゃあ、どちらが四番目で、どちらが五番目？ 当然、歌を作った奈羽ちゃんが五番目というのが自然。いや、そもそも、五番目の内容を、どうして五番目の彼女が知っているの？ 当然、それは前世で、その歌詞を知っていたからで説明がつく。ならば、それは四番目でも知つても不思議ではない。だって三番目の私でも、あの歌詞は事前に知つていたのだから。

さらに遡れば、いつたい誰があの歌を作ったのか？ といつた疑問に行き着く。

部活の前に奈羽ちゃんと圭君が口論になつていて。四番目と五番目で争いになつていて……。一人は真相を知つていて。そう考えるのが自然。

私はどうすればいいの……。どちらが敵で、どちらが味方なの……。

私は玄関から、お気に入りのスリッパを履いて、すぐに一階の自室に向かう。母に会いたくなかったから。

「咲良？ 帰ったの？ 来なさい」

母に呼び止められた。私は仕方なく階段を下つる。

「なあに、お母さん」

私は平静を装い答える。

「帰ってきたら、ちやんとお父さんにただいまつていーなさー」

溜息が出る。

「お、お父さん、ただいま……」

私は冷たくなつた父を見下ろし言つ。

あはははは、死んでるよね？ どう見ても、死んでるよね？ この父親は今どういう気持ちで死んでるのかな？ 妻に生きていると思われて、幸せなのかな？ 仕事ばっかりでろくに家にも帰つてこないで。もう、ここ最近まともな会話もなかつたじゃない。同じ家に住んでる他人だつたじやない。いい気味よ。

……。

ねえ？ なんか言いなよ。

私は何も言わない、動かない父に一瞥し、自室へ向かう。

今日も朝から進展はない。いつも通り生徒指導室に呼び出され、奈羽ちゃんがいつもの「もつともらしい、データラメお説教」で先生達を撃退したくらい。

少し焦り始めている。大体、日和ちゃんの頭に付いてるビニール袋は何なのよ？ ウケ狙いなの？ ボケたらツツコミ入れないと駄目なの？ 私はそんなのに負けない。

と、思つたら圭君が指摘する。圭君の負け決定。ふう……、これも現実逃避よね……。

お昼休み。何しよう？ ああ、屋上行つて悠君をからかわないといけないのね。「なんでよ！？」つて連呼させないと……。よく考えると、恥ずかし過ぎるよね、あの男。まあ、私の前世なんだけどね、まさに我ながら恥ずかしい。嫌な事はさつやと済ませよう。

「でも、実際どうなんだろうね？ あの二人」

「もう、本当に付き合えればいいのに」

「何それ？ 願望？」

屋上へと登る階段で話し声が聞こえてくる。私に気付いた二人の女生徒は急に会話を止める。なんだろう？ 私は二人の横を通り過ぎる。その内一人には見覚えがあつた。そう、悠君に告白した人。確か「柳朋子」。彼女には何か色々と印象が残つている、はて？

屋上に着くと、悠君が何やら顔の運動をしてくる。しかしると表情が変わる。悠君はイチョウの木の下にいる日和ちゃんを見ている。

あれ？ 私なんて言うんだっけ？ 少し忘れてきた。

「日和ちゃんどこに行かなくていいの？」

「こんな感じだったかしら。

「なんでだよ」

正解。私も日和ちゃんを見ながら台詞を続ける。

「うん？ 日和ちゃんが元気なかつたから？ なんか寂びしそうにしてるよ？」

「ううそう、こんな感じだつた。思い出してきた。私は更に続ける。「日和ちゃんの事好きなんでしょ？」

「なんですよ！？」

食いついた！

「あれ？ 反応まで日和ちゃんみたい。そんなに好きなんだね。奈羽ちゃんに報告してこない！」

「だから、なんでよ！？」

「もう、すっかり日和ちゃんね……。愛してるのね？」

私は畳み掛ける。

「なんでよ！？」

「なんて、面白い生き物なの……。

「さあ、行きなさい！ 愛しの日和のもとへー！」

「もうおかしいでしょ！？」

「あれえ？ いいの？ 放つておいて。あのイチョウつて確かあ……信也スペシャルだつたよね……？」

「嘘でしょ！？」

そう、叫ぶと悠君が走つていってしまう。おもちゃが逃げた。どういうか、悠君まともな会話してないよね……。

放課後。ただ、時間がだけが過ぎていく。何もわからない。進展はある事にはあるが、犯人への手がかりは、ほほ無い。疑惑だけが募

る。

そういうえば、悠君が田和ちゃんの後をつけるのは今日ね。どうしてみよう? 行つてみる? 意味は無せうつだけど。一応、確認だけしてみよう。

私は田和ちゃんの後をつける悠君の更に後ろをつける。なんか、まぬけね……。一人して、内心で「ペッタン、ペッタン」言つてゐのかな。

徐々に一人の歩く速度があがる。少しづつ、悠君が田和ちゃんに近づく。かなり近い。知らない人が見れば一人は一緒に帰つてると思つだらうね。

さて、意味は無さそうだけど、ここで一つ確認。

一番田の田和ちゃんを一番田の悠君が尾行する。そして、更にそのあとを二番田の私が尾行する。じゃあ、私の後ろには四番田がいるんじゃない? まあ、いないだらうけど、念の為にいると思つて行動しよう。いや、誰かを確かめよう。

夕日の中、田和ちゃんと悠君が至近距離で歩く。そして、悠君が立ち止まる。このタイミングね。

私は後方に向かつて全力で走る。もし、四番田が尾行していくなら逃がさない無い。

どう四番田さん? 予想外でしょ? なんか笑えてきた。結構、面白いかもね。

でも、誰もいない……。不思議……。よく考えて。四番田は私の来世なんだから、当然にその行動を知つている……。予想されて当然……。

とほとほ、私は落ち込みながら、そんな擬音を残しながら歩く。少しすると、靴屋の中から圭君が出てくるのが見える。手にはビール袋、中身は靴かな? 私は彼に近づき声をかける。

「お買い物?」

「あ、うん。靴ばらくなつたから新しいのを買つてきた」

私の問いに驚いた風もなく答えた。ここ最近の彼の会話のレスポン

ンスは異常だ。

「全然、ぼろくないよね？」

「いや、踵が大分磨り減ってる」

返答が早い。私達は歩きながら話す。

「奈羽には気をつける。これ、どうこう意味かな？」

私は思い切って聞いてみる。

「そのままだ。気をつける」

「ねえ、あたな。何番田なの？ 四番田？ それとも五番田？」

「何言つてるんだ？ 意味不明だ」

私は焦燥感に駆られる。とにかく、この即答には耐えられない。

「私が知らないと思つてるの？ ふざけないでよ……」

「お前の勘違いだ。気にするな」

「どうして何も教えてくれないのよー？」

「いいか、咲良。これはもう決まってるんだ、その意味を忘れるな
「そつちこそ言つてる意味がわからないわよー？」 何が決まってる
のよー？」

「この会話がだよ。もう決まってるんだ。お前がどうこう言つても

変わらない。無駄だ」

「だから、どう決まってるのか教えてよー？」

私は知らず知らずのうちに大粒の涙を零していた。

「お前はお前の事だけ考えている。もう、俺にからむのはよせ」

「なんなのよ……。この即答なんとかしてよ……。絶対何も考えて

いないでしょ？ どうしてそんなに言葉がすぐ出てくるのよ。

「この会話は俺が変えたいと思わない限り変わらない。そして、俺

は変えるつもりはない、お前がどう頑張つても無意味だ」

「いったいなんなのよ……。なんなのよー？」

「お前にとつて必要な会話だから変えない。それだけだ」

私は耐えられずに走りだした。逃げ出した。

私は自室で枕に顔をうずめる。精神が不安定ね……。普通に考え

て、まともにいられる状況じゃなによ。だって父親の死体と生活しているのよ？ おはようとか、ただまとか言つても。おかしいじゃない。

それでも、それでも、可愛い妹や弟を救いたいのよ。どうして、誰も助けてくれないのよ？ おかしいじゃない、奈羽ひやんも圭君も。

でも、彼、圭君は私に必要な会話を言つてたよね？ どうこう意味？ 会話は変えられない？ 未来は変えられないってこと？ いや、変えられる。現にお昼休みに悠君との会話は微妙に変化していた。

……。

よく考えて。何かあるはずだから。

未来が変えられるのは、すでに、その状況を知つているから……。じゃあ、さつきの圭君との会話を前世世界との違いを確認する術は？ ないよね。

私は私なのだけれども、前世世界での私の行動は知らない。じゃあ、私は私で今を生きていること？

話を飛躍させると、私が私の意志で行動すれば、それは、つまり自動的に前世世界での私の行動と一致してしまう？ つまり、私が、どんなに考えても悩んでも、導き出される結論は前世世界の富原咲良の結論と同じになつてしまつ……。

更に飛躍させると、未来を知つていないと、未来は変えられない？ 昼間の悠君には未来を変える事はできなかつた？ そうよね、最初のほうは悠君の時の記憶と一致する。後半は私が調子に乗つて続けただけ。

じゃあ、さつきの圭君との会話も、圭君の前世世界か、その前の世界と一致していた？ だから、あれ程、知つていたかのよつな会話のレスポンスになつっていた。私は知らず知らずのうちに前世世界の富原咲良の言動をトレースしていた……、つてことだよね。段々とのこの世界の仕組みがわかつってきた。

未来を変えないとよりも、変えることのほうが難しいのね。知らない未来を変えない限り、その後に待つ結果は変わらない。このまま行くと、私は未来を変えられない。勝手に予定される未来をなぞってしまうだけ。事実、前世二つでの富原咲良は失敗している。

自分の能力に過信していた。私が失敗するはずがないと思っていた。でも、これなら、誰でも失敗する。でも、やらないと。奈羽ちゃんも圭君も助けてくれないなら、私がやるしかない。

第二章（3）

今日の私は本気だ。一人に、奈羽ちゃんと圭君に挑戦状を叩きつけるつもり。未来は変えられない？変える方法なんていいくらでもあるのよ。

例えば、今日、お昼休みにみんなで食べるけど、富原咲良は片平奈羽と一緒に登場した。つまり、どこかで合流したのよ。そこで、合流しないで、直接行けば、私の知らない富原咲良の行動を変えたことになるのよ。

「咲良？」

え？

イチヨウの木の側、もつ日和ちゃんが見える位置にまで来ていた。声の主は奈羽ちゃん。

「咲良も日和のことが心配だつたの？」

奈羽ちゃんは優しく声をかけてくれる。

「う、うん……」

「一緒にいこ」

そして、先に進み日和ちゃんに声をかける。私もあとに続く。もしかして、未来を変えれなかつた？ 元々、これは各自向かつていたの？ たまたま一緒になつただけ……？

ちょっと待つて……。私が未来を変えるつもりで行動した結果が、変えないことに繋がつたの？

頭痛くなつてきた。凄い具合悪い。

私達三人は日和ちゃんを真ん中にし、並んでお弁当を食べる。

「今日はお揃いか？」

そう言って歩いて来たのは、悠君。すぐ後ろに圭君もいる。

「天氣いいからね。悠一と圭も一緒にどう？」

奈羽ちゃんが無邪気な笑顔で答える。

「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそつだよ」

「あれ？ 元々合唱部の物じゃなかつたの？」

記憶通りの会話が続く。でも、ここで分岐する。田和ちゃんが内心の言葉を言つか言わないかで……。

ちょっと待つて……。未来を知らない田和ちゃんが、びつして未来を変えたのよ……。おかしいじゃない。

もう何がなんだかわからなくなってきた……。具合悪いよお。

あ、そっか、未来を変えたのは悠君の時の田和ちゃんだから、私じゃないってこと？ ジャあ、あの時の田和ちゃんは誰なのよ……。

「先生達に水を指されて、ちやんと活動出来てないけど、早くみんなと歌いたいなあ」

「今更言つのもなんだけど、俺、歌マジ苦手」

「嘘言え。お前カラオケ好きじゃないか。謙遜か？」

「訂正。合唱みたいな曲を歌うのはマジ苦手」

「別に曲の制限なんてないよ。好きな歌を歌えばいいんだよ。みんなで、それぞれ一曲ずつ選んで歌いましょう」

「これは、私が岡本日和の時と一緒に。私は挑戦状を叩きつける。このタイミング。

「でも、本当は合唱部じゃなくてもよかつたんだ。みんなで、この五人で集まれるなら、なんでもよかつた。今みたいな時間があれば、私は満足」」

奈羽ちゃんの台詞に被せてやつた。でも、奈羽ちゃんは最初から私を見て微笑みながら台詞を言つてた……。どうこうこと？

「何？ 一人揃つて？ もうこんなところ今まで合唱の練習かよ？」

圭君が言つ。さつ、いつも通り、高速のレスポンスで。なんのこれ？

「どこが合唱なのよ……」

「でも、息ぴつたりだつたな？ 相当練習したんだ？」

田和ちゃんと、悠君が追隨する。

「私と咲良はね、息ぴつたり！ いつでもぴつたり！」

奈羽ちゃんに抱きつかれた……。かわいい。いや、そんな事じや

なくて……。

知っていたんだよね？ これは奈羽ちゃんも圭君も知っていたんだよね？ どうして……。わからない、何もわからない……。

私は酷く落ち込んでいる。

放課後の予定は、日和ちゃんも悠君も奈羽ちゃんに助けられるのね……。よく考えると時間的にすごいタイミングだよね。あと三十分くらいで日和ちゃんの所へ行つて、家に送つてすぐ悠君の所へ。やつぱり奈羽ちゃんは私達の来世なんだよね。

何気なく旧校舎に来てみる。

どこからか、ピアノの音色と綺麗な歌声が聞こえる。奈羽ちゃんだ。

私はゆっくりと、とぼとぼと、合唱部の部室を目指す。

私も前世の一人のように助けて欲しかった。でも、彼女が殺人鬼かもしれないんだよね……。今はそんな事どうでもいい。

私は部室のドアを開ける。それは音もなく開いた。中央に大きなグランドピアノ。座るのは奈羽ちゃん。彼女は私を見てにっこりと微笑む。

……。

私がここに来る事も知っていたのね……。何もかも予定通り……。全部知つていて、私が苦しんでいるのも知つていて、それでも何もしてくれないのね……。

「やつぱり奈羽ちゃんが犯人なの？ 一人を殺すの？」

私は思わず、言つてしまふ。彼女は大きく顔を振る。

「違うよ、咲良」

「じゃあ、圭君？」

「それも、違うよ

「じゃあ、誰が殺すのよー？ 知つているんじょー？」

「残念だけど、わからない……」

私は感情的になり、奈羽ちゃんのところへ詰め寄り、そして言い

放つ。

「あんたさ、昔つから気に入らなかつたのよ。なんでも上から田線で他人見下して、なんでも知つてますつて顔して馬鹿にして」

そんな事思つてないよ、奈羽ちゃん。

「私が内心、あんたの事、なんて呼んでたか教えて上げようか？歩く綺麗事、しゃべる偽善つて呼んでたのよ。傲慢で尊大なあんたにぴつたりのあだ名だと思わない？」

助けてよ奈羽ちゃん、これ言つてるの私じゃないよ……。

「全部知つていて、私が予定通り苦しんでいるのを見るのは、それで楽しかつたでしょうね？ いつたい何なのよ、あんたは！？」

嘘だよ、全部嘘だよ。奈羽ちゃん信じて。もう駄目、泣き崩れてしまう。

泣き崩れてしまつた、私の上に何かが、ふわりと舞い降りる。これは記憶にある。そう、奈羽ちゃんだ。私は奈羽ちゃんにしがみつき、声を出して泣いた。

「怖かつた……。辛かつた……。悲しかつた……。」

「少し長話になるかもしれないけど、我慢して聞いてね」「彼女はゆつくりと話だした。

「確かに、咲良の言つ通り、私には傲慢なところも尊大なところもあつたかもしれない。でも、それは幼い頃より心に誓つていたの」奈羽ちゃんの身体、凄く温かい……。

「圭、咲良、悠一、日和。この四人には優しくしよう、厳しくしようと、そして、ちゃんと叱ろう！」

「凄くいい匂い。お花の匂い……。

「そして、それと同時に、決して冷たくしない、決して怒らない、決して甘やかさないって誓つた」

奈羽ちゃんの鼓動が聞こえる、感じる。すくなくつくづく。

「怒る事と叱る事は違う。厳しくする事と冷たくする事は違う、優しくする事と甘やかせる事は違う、その一つ一つの意味は似ている

けれど、同じ様に見えるけれど、全然違う」

凄く耳に心地いい、ゆっくりしたイントネーション。

「怒る事、冷たくする事、甘やかせる事は自分の為の行為なの。逆に叱る事、厳しくする事、優しくする事は相手の為の行為なんだよ。だから、傲慢だと思われてもいい、尊大だと思われてもいい、なんて言われてもいい。私はあなたの為に、あなた達の為に生きているのだから」

いつの間にか奈羽ちゃんは私の顔を両手で優しく包んでいた。

「うん……、うん……、全部、ちゃんとわかってるよ奈羽ちゃん……。甘えたかつただけなの……」

私は声を絞り出す。

「うん。咲良は可愛いから、甘やかせてしまつかも。心の弱い私を許してね」

「うん、うん……」

まだ、しがみついて私を引き離し、奈羽ちゃんは立ち上がる。

「さて、日和と悠一のところへ行かないと。」めんね咲良、お家まで送つてあげれなくて」

奈羽ちゃんはすこく優しそうに笑う。

「少し、部室で休んでから帰つてね。鍵はそのままいいから」

奈羽ちゃんは部室から出ていこうとする。

「そだ。明日ね、うち、お爺ちゃんとお婆ちゃんが法事でお泊まりなの。明日は一人でお留守番。いつか、役に立つから憶えておいてね」

そう言い、奈羽ちゃんが部室から消える。

そして、金曜日、決戦の日。やっぱり日和ちゃんはお休み。肩……、痛かったよね。酷く生々しく、その痛さが思い出される。なんとかしてあげたかったけど、私は私で大変だったから……。時間だけが過ぎ去る。いつたい、どうすればいいの……。

とりあえず、学校では奈羽ちゃんと圭君を監視するけど、変わっ

た所は見受けられなかつた。

犯人はこの二人ではないと思つ……、思いたい。

何事もなく放課後になつてしまつ。

その時まで、あと三時間といったところだらう。気がつけば奈羽ちゃんはいない。あと圭君は……。風が冷たい。

どこを探しても、圭君もいない……。あの二人はいつたいどこで何をしているの？ そういえば、今日、奈羽ちゃんは一人でお留守番とか言つてたね？ 時間まで奈羽ちゃんのお家に行つてみよう。奈羽ちゃんのお家は、結構大きな造り、元々、農家だったのかな？ 今は売り払つてしてないみたいだけど。その影響か周囲に民家もまばら。

奈羽ちゃんのお家に近づくと、煙が見える。焚き火だ。その側にいるのは奈羽ちゃん。

「奈羽ちゃん？」

私は声をかける。

「咲良、来たね」

彼女は驚く事もなく言ひ、やつぱりこれも予定通りなのね……。

「焚き火？」

私は内心の不快感を隠し尋ねる。

「うん。いらなくなつた靴を焼いてるの」

「靴を？」

「うん。靴を。念入りに焼いておかないとな。跡形もなく……ね？」

「靴……、靴？ 何かひつかかる……。」

「あつたかいね」

疑問もあるけど、焚き火が暖かい。今日は少し肌寒いから、何かこの温もりが嬉しい。

「今日だね」

奈羽ちゃんが静かに言つ。

「うん」

私も短く、静かに答える。

「咲良は私の血縁の妹。本当によく頑張ったよね」

「ねえ……。なんとかならないの?」

「それは、あなたの兄さん次第だよ」

「意味、わからないよ……」

「私は、こうして、ただ、見ている事しかできない。信じる事しかできない」

「わからないよ……。本当にわからないよ……」

私はまた泣いてしまう。

「咲良……。私の言葉憶えてる? 私はね、ただ、気付いてほしい、気付いてほしい、思い出出してほしい、思い出出してほしい。ただ、それだけなんだよ」

「何をよ!? はつきり言つてよ!?!」

私は感情的に叫ぶけど、彼女はただ、静かに微笑むだけで何も答えてはくれない。

また、私は耐え切れずに逃げ出した。

私はそのまま自宅に駆け込む。泣きたかった。ただ、泣きたかった。

「咲良? お父さんにただいまは?」

母の声が聞こえる。

微かな死臭が漂っていた。私の中で何かが壊れた。

私はゆっくりとリビングに向かい、そして母に言つ。

「お母さん。お父さん死んでるよ」

バチンと、私の頭から音がした。手にした箒で叩かれていた。

「なんて事言'うの!?!」

と、母がもう、人とは言い難い表情で叫んだ。

「どこの見ても死んでるじゃない!? 頭おかしいんじゃないの!?!」

バチン、バチンと何度も頭から音がする。でも、もう痛くない。

「生きてる！ 生きてる！ 生きてる！」

狂ったように箒で叩かれる。

「死んでる！ 死んでる！ 死んでる！」

私も叫ぶ。

「咲良が死ね！ 咲良が死ね！ 咲良が死ね！」

……。

信じられなかつた。

もういいよね……？

さようなら。

……。

第三章（3）（後書き）

以上でプロローグは終了になります。お読み下さった方、ありがとうございます。次の「第四章 伊吹圭の場合」「第五章 片平奈羽の場合」が本編になります。高原咲良が破れなかつた来世の壁を伊吹圭がどうやって突破するのか、片平奈羽が前世の自分を許せるのか、といった所をテーマに書いていきたいです。

ど、どなたか、感想よろしくお願ひします……。このまま書き続けて大丈夫でしょうか……。どんな意見でもお願ひしますーー！

第四章（1）

第四章 伊吹圭の場合

四度目の月曜の朝。いや、十五年ぶりのこの日と表現したほうが正しいのか。

俺は岡本日和だった、木村悠一だった、富原咲良だった。そして、今の俺は伊吹圭だ。

カーテンの隙間から差し込む光がまぶしい。俺はベッドから降り、カーテンを開け、外を見る。天気は快晴。

落ち着いている。不思議な気持ちだ。昨日までの伊吹圭とは別人、俺は生まれ変わった。それはそうだろう、一気に四十五年分の記憶、経験が付与されたのだから。

咲良……。辛かつただろう。最後の記憶はもう断片的だ。裸足で泣きながら、奈羽の家に走つていったのが最後の記憶だ。

で、俺はどうすればいい？ 富原咲良が行き着いた結論「未来は知つていなければ変えられない」、つまり、知らない自分の行動は人形劇のように前世世界の自分の行動をトレースしてしまって。いくら考へても無意味、全く同じ結論に至る。まあ、それはそうだろうな、同一時間軸に前世と来世が混在するのだから、生まれ変わったら別の世界になつてましたってのもおかしい。全員が全員同じ行動を取るから成り立つ仕組み。

未來の記憶さえなければ、何度繰り返しても同じ結果になるだろう。

この「未來は知つていなければ変えられない」というルールを破ることは不可能。逆に知つていれば容易に変えられるという意味をも持つ。

大事なのはそこだろ？ いつでも、自分の知つている未来だけを選択し、歩めば、いざという時に未来を変えられる。だが、それで

は選択肢が限られチャンスを逃す可能性が高い。慎重になりすぎで、結果同じだったでは笑えない。

咲良は自分一人で解決することを選んだ。来世もあるとは知らなかつたからな。来世の俺に協力してもらう。つまり、俺の知らない俺の未来を変える方法は一つだけあるのだ。

「来世の俺に今世の俺の情報を白状させる」

思わず声に出してしまったぜ……。俺って天才。

で、俺の来世は誰なの？ まあ、奈羽だろうな。まじかよ……。あいつ俺のあんなことやこんなことを知ってるのかよ……。まあ、俺も咲良や岡本のあんなことやこんなことを知ってるけどさ……。鼻血が止まらない……。

妄想激しいぜ……。

で、どうやって白状させるの？ 来世の俺は今、この瞬間の俺の記憶すら持つてるんだぜ？ 前世世界の俺が言つてたろ、「俺が変えたいと思わない限り変わらない」つてな。未来を変える権利を有するのは俺、伊吹圭ではなく片平奈羽にしかない……。

てか、本当に奈羽なのか？ 確か奈羽の作った歌の歌詞に五番目が犯人かのような記述があるけど、自分で告白するか？ 告白する前にやめろよつて話だよな。

じゃあ……、奈羽は俺達の来世ではない？ 別の誰かが五番目か？ いやいや、確實に俺達の記憶は持つているはずだ……。もしかして、六番目とかか？ それは有り得る。更に言えば……、全く別系統の生まれ変わりつて線も捨てがたい。

「あいつは誰だ！？」

また声が出てしまったぜ。

まずは、そこからだな。片平奈羽が何者かの調査から入ろう。

「いつてきまஆす！！」

俺の名前は伊吹圭。高校一年生。背は高い、俺より背が低い奴よりは。顔もいい、俺より不細工な奴よりは。頭もいい、俺より馬鹿

な奴よりは。そして女にモテる！ 僕よりモテない奴よりは。

運動神経も抜群！ 僕より……。

考えすぎで、家を出る時間が遅れてしまった。ぜえぜえ。なんで俺はパンを咥えて走ってるんだ？ 息苦しい。ビードモドア……、ビードモドア……。

とりあえず、パンが食い終わらないと大変なことになる。パンを咥えて走って、角を曲がると可愛らしい女子高生にぶつかってしまうんだ。これは絶対だ。

ほらね。

「なんですよー？」

俺の名前は岡本日和、女子高生だ。身長157センチ、体重は……、秘密だ。自分で言つのもなんだけど、結構可愛いと思う。性格も明るい、そして、本能の赴くままに生きている。趣味かあ、色々あるよ？ エア読書とか、エア登山とか、あ、そういう、最近の流行はやっぱりエア焼肉かな。昨日なんて骨付きカルビ一キロ食べちゃったよ。特技かあ、やっぱりエアお勉強かなあ？ なんかわかつちやうんだよねえ、不思議ど。あとエア編み物もプロ級。最近は髪をもつと伸ばしたいかな、奈羽くらいの長さが理想かな。ああ、でも、似合わないかなあ？ 伸ばすと色々めんどくさいよねえ。

……。
俺はいつたい何をされたんだ……。

角を曲がったんだ……。気がついたら女子高生を押し倒してたんだ。そしたら俺も女子高生になつてたんだ……。不思議だよね。よくあるよね。ねえよ。ねえ？ とりあえずだけたら？ 謝ろつよ。そうだった。いや、まずいぞ……、頭に岡本が住み着いたら問題だぞ……。悠一みたいなつちまつ……。俺はあたしだあ！！ 誰か助けて……。

でもさあ？ 咲良の時つてあんまり岡本語でなかつたよね？ なんでだろ？ いや、結構初日は大変だつたぜ？ いや、俺はいつたい誰と喋つてるんだ……。え？ あたしだよ。あたしあたし。は

「はい、俺俺。

さて、気を取り直して学校行くか……。つて、この人誰よ！？
ああ、そうだ、角曲がったらぶつかったんだった……。
でもさあ？ もういい加減にしてください岡本さん……。

「あ、ごめん……」

俺はそう言い、じける。それは、色素の薄い長い髪、肌が綺麗で
美人な人だった。彼女は無言で立ち上がり、埃を払う。
「いつまで、上に乗つてるのかと思った」

「ホント、『ごめんなさい』……。怪我ないですか……？」

「大丈夫」

そう言つと、彼女は歩きだし、学校へと向かう。彼女には見覚え
がある、「柳朋子」だ。そして、今思い出した。俺と奈羽の関係を
岡本に聞いてきた人だ。俺自身、つまり、伊吹圭の記憶には一切な
い人。面識もない。いや、あるかも。じつちだ……。

つて、遅刻する！ ダッシュ！

少し走ると岡本たち四人の姿が見えてくる。予定通り。

「おはようーー！」

俺は明るく挨拶する。つて、あれ？ 間違つたか？

「よう！」

悠一だけが挨拶してくれる。

「何か面白い表現だね」

と、奈羽が言つ。

「うん？」

「奈羽ちゃん？」

岡本と咲良が聞き返す。

「あ、ごめん。間違えた。おはよう圭」

「なんだ？ ゲームのやりすぎなんじゃねえの？」

俺は奈羽に近づき言つ。奈羽がゲームなんて噂があるけど、実際彼女がゲームの話をしているのは聞いたことがない。はて？

「奈羽……？」

俺は驚いて言う。奈羽が大粒の涙を流している。どうして……？
「ごめん。そんなつもりじゃ……」

俺は動搖し、弁解する。

「何、てめえ泣かしてんだよ！？」

悠一に胸元を掴まれる。じぶしを握り振り上げるのが見える。

「いや、俺は何も……、悠一……？ 泣いてるのか？」

悠一も泣いている。なんだこれは？

「てめえも泣いてんだろう！」

嘘？ 俺は自分の頬をさわると、涙で手が濡れる……。

「奈羽ちゃん」

咲良が奈羽に抱きついて泣いている。

「なんなの？ どうしてみんな泣いてるの？ あたしも悲しくなつてきたよ。うううく」

岡本まで泣き出した。俺達五人全員で泣いてる……。

登校中の他の生徒達が好奇の目を注ぎ素通りしていくが、俺達の目には映らなかった。

あれはなんだつたんだ？ 奈羽が泣いたところなんて何年ぶりに見ただろう……。それに驚き、みんなが貰い泣きしたつて事か？

「聞いた体育館のピアノの事？」

「なんか、先生達が騒いでいたね」

教室では、いつもの会話がなされている。まさにリープレイだ。悠一の時の記憶と寸分たがわず同じ会話、同じ動作だ。この教室では俺が干渉しない限り何も変わらない。悠一でも不可能だ。

ピアノの件は気になる。すでにこの時点で紛失しているという意味を持つ。そう、奈羽はいつピアノを強奪したのか？ 前世二つと今世、計三回の記憶の復活は全て月曜の目覚めから。ならば、奈羽も記憶が戻ったばかりのはず。このわずかな時間でピアノを強奪したのか？ それとも記憶が戻る前から強奪していたのか……。

あと「柳朋子」で思い出したが、俺は奈羽に告白しなければいけ

ないのか……。確かに今日の昼にはそんな噂があつたな。

よく考えてみると、奈羽は俺の来世かもしれないんだぜ？ 自分に告白かよ。いや、嫌いじゃないけどさ……。まつ、俺の知らない未来は勝手に自動的にそつなる。告白するなら告白しちまうんだろ、どうせ。いや、知つてしまつていい。進んで告白しないと、未来は変わる。

さつきの事もあるし、何が悪かつたのかわからないけど、謝つておくついでに言うか。

その前に合唱部の部室を見に行くか。ピアノの件は気になる。

俺は旧校舎の階段を少し、急ぎ足で登る。階段の壁には各部の勧誘ポスターが数多く貼つてあつた。定番のものから、マイナーなものまで多岐にわたる。オオクワガタ同好会つてなんだよ……。え……？ 庭部のポスターがない……？ 合唱部と同じで新設されたのかな？ まあ、そんなところだろう。俺は先を急ぐ。

「ここからは立ち入り禁止です」

なぜか、部室の前にいたのは片平奈羽、その人だ。驚かないよ。

予想通り、予定通りなんだろ？

「うん。まあ、そうだらうな……」

「うん、そういうこと」

「もしさ、俺が無理矢理、部室に入つたりどつなる？」

「入らないから、どうにもならないよ」

「なるほどね……」

俺は部室の扉を開け、中に入る。中には大きなグランドピアノ。机が幾重にも重ねてあり埃まみれだ。俺は部室の中から振り返り奈羽を見る。

「どうだ、奈羽？」

「うん、そういうこと」

奈羽も部室に入つてくる。そして、扉を閉める。奈羽は別段、驚いた様子もない。

「なるほどね。会話にすら意味はないのか……。元々、俺はこうい

う行動をとつていたつてことか……

「うん、そういうこと」

ふふ、咲良時代を思い出す。何をどう足搔こうと予定通りの結果になる。俺は俺自身の自分の意思で生きている気がしなくなる。それでも、自分の気持ちを押し通さなければいけない。

「その、なんだ。今朝はごめん。泣かせちゃって……」

これはけじめだ。予定とか関係ない。

「圭は何も悪くないよ」

奈羽は優しく言つてくれる。さつきは予定通りに動かされている感があつたが、今度はちゃんと話をしている気がしてくる。

「えつと。奈羽、好きだ。付き合つてくれ」

ついでに告白してみた。

「え？」

「うん？ 意外な反応だ……」

「えつと、駄目か……？」

「ふ……ふふ……。そうくる？ びっくりした」

「あ、いや、なんだ？ その……」

「ふわりと、奈羽に抱きしめられた……。凄く優しく。

「ええ、ええ、好きだよ、大好きだよ。いいよOKだよ」と、彼女言つ。

「え……、ええ！」

嘘だろ！？ 俺達一人つて付き合つてたの！？ そんな素振り一切なかつたじゃん！？ 僕の彼女はあのミラクルナウ！？

「そだ、ちょっと昔話するね」

俺を抱きしめながら彼女は話しだした。

「昔、昔あるところに、羊さんと蠍さんがいました。二人はとつても仲良しです。どこへ行くのも一緒に。ごはんも半分ずつ。てくてく、てくてく歩きます。一人はある川辺に着きました」

ああ、奈羽のお説教は耳に心地いいな……。

「川の向こう側には、美味しいそうなりんごが実っている木が見えま

す。でも、羊さんは泳げるけど、蠍さんは泳げません。羊さんは考えました。「そうだ、僕の背中にお乗りよ」と、言い蠍さんを、ちよこんと背中に乗せてあげます。蠍さんは大喜び、りんご大好き「ああ、眠くなってきた……」。

「羊さんは川を一生懸命泳ぎます。りんご大好き。でも、川の真ん中まで来たあたりで、羊さんの背中に激痛が走ります。蠍さんが、その毒針で羊さんの背中を刺したのです。羊さんは薄れいく意識の中聞きます、「どうして、刺したの?」「ぼくの事が嫌いなの?」と、蠍さんは悲しそうな顔で答えます、「ううん、好きだよ、大好きだよ。どうして刺したのかわからない、身体が勝手に動いたの」と。こうして一人は仲良く川底で眠りにつきました

やばい、寝てた……。

「ね?面白お話だと思わない?」

俺は今、幸せだ。岡本、悠一、咲良……。お前達はお前達で頑張れ。つて、それは流石に酷いだろ!! えええ、明日からが凄い楽しみだよお、危ない事したくないよお。

「圭? 授業始まるよ。教室戻るよ」

「あ、うん」

奈羽の言葉で現実に引き戻される。

「そだ、明日からお弁当作つてくれるね」

「本当に? すげえ楽しみ」

俺達二人は楽しく会話をしながら旧校舎を後にする。はて? なんかおかしくない?

第四章（2）

授業中も上の空だ。状況を整理しよう。俺は片平奈羽に告白をしたんだ。そしたらOKされたんだ。自分で何を言っているかわからない。なあ？ 普通におかしいだろ。いや、おかしくはない、これも前世世界のトレースだろう。ただの口だけ、会話だけという線が濃厚だ……。だつて、前世世界では伊吹圭と片平奈羽は喧嘩しているというか、対立していた。大体、俺が片平奈羽と交際していると、周囲の男子生徒にわかれば命の保障すらない……。待てよ、もしかしてこれが連續殺人事件の真相か？ 恐ろしいぜ、嫉妬つてやつはよつ……、ちゃんと現実みようぜ。羨ましいのはわかるけどさ。いや、それよりも、俺と奈羽は同一人物かもしけないんだぜ？ いやあ、でも違うんじゃないかな？ 奈羽はなんていいうか、他の四人とは住む世界が違うというか、特別なんだよなあ……。魂が綺麗つていうかさ……。俺達四人は魂黒いぜえ？ 岡本なんて特に真っ黒だよなあ。咲良も、ああ見えて自己中だし。悠一なんて自分の事女子高生とか思つてるんだぜ？ 頭大丈夫かよ、マジ病院行けってな。うん、それに引き換え奈羽は天使だよなあ……。なんで、あんな子がこの世にいるんだろうなあ。

でもさあ、ふと思つたけど、咲良はあるの後どうなつたの？ あれも誰かに殺されたの？ どうだろうな、もう足が痛いくらいしか憶えていない。でも、記憶がないということは、あの後すぐに死んだんだろうな……。まあ、可哀想とは思わない、だつて、あれは、俺なんだから。変な感覚なんだよ、今世の咲良には同情しない、まだ生きてるからな。これから的事を考えると氣の毒だけど、俺は既にそれを体験している。表現が難しいな。

どうでもいいが、岡本さん、もう出でこないで下さー……。

ラーメン食いてえ。ラーメンは俺の血液なんだよ。血液で思い出

したが、昼休みに階段の窓ガラス落ちるよな？ あれなんなんだ？ 階段に到着すると、遠くで岡本日和の声が聞こえる。おそらく、悠一を呼び止めたのだろう。そもそも、岡本は一人日だよな？ なんで、あいつ未来がわかるんだ？ エ？ 普通に超能力者なんだよ。

「あれ？ 奈羽？」

俺は階段の窓の近くにいる片平奈羽に声を掛ける。

「圭。来たね」

彼女は驚いた風もなく答える。

「俺が来るのを知っていたのか……」

「もちろん」

周囲には生徒もまばら、俺達二人を遠巻きに回避していく。「何してるんだ？ 知っているよな？ これからどうなるか」

奈羽は俺を少し見て、わずかに微笑む。

「もちろん。ちょっと実験しているの」

「実験？」

「なんだそれ？」

「見てて」

そう言ひつと、奈羽は振り向き、通りかかった女子生徒に声を掛けれる。

「あ、田中さん。明日雨だから傘忘れないようにね」

と。声を掛けられた女子生徒が、「あ、うん。そうなんだ。ありがとう」と、礼を言つて立ち去る。ちなみに、俺の記憶、前世の記憶では雨は降らなかつた。つまり、彼女の言葉は嘘。

「二十秒前」

静かに彼女が言い、窓の下に立つ。そして、二十秒が経過する。

「嘘だろ！？」

窓ガラスが音もなくはずれ、片平奈羽目掛け落下する。俺はまさに彼女を庇い飛びのぐ。落ちたガラスが割れ、大きな音を立てる。

「死にてえのかよ！？」

俺は反射的に大きな声を上げる。

「うん、まあ、やつこつ」と

「どうこつことだよー!？」

周囲では悲鳴やら、怒号が聞こえる。

「あ、大丈夫だよ。窓ガラス外れたみたい」

彼女は俺ではなく、周囲の生徒に説明をしている。

「圭？ ちりとりと雑もつてきて。片付けないと危ないから
いったいなんだこれ？ 不可解な現象だが、俺は奈羽の指示に従
う。雑とちりとりを持つてくると、奈羽はなにやら先生に説明をし
ている。

「圭、学食先行くね。あとから来てね」

そう言い、奈羽は急ぎ足で立ち去る。

そうか、岡本達の為に席を取らなければいけないのか。そして、
俺は後から合流する。そもそも、この窓ガラスは奈羽が落としたの
か？ どうやって？ 実験とか言つてたよな。明日が雨とかどうと
か？ いや、単に落ちるのを知つていただけだらう。
「いつたい、いつになつたら、どこでもドアが開発されるんだよ…

…
俺は予定された台詞を言いながら、窓際の席に着く。つて、奈羽
しかいな…。

「不正解」

奈羽は無邪気な笑顔で迎えてくれる。

「岡本と咲良は？」

俺は疑問を口にする。

「さあ？ 今の私にはわからない。どこで何をしているのかしら?
け、今朝の事で未来が変わったって事か……？」

俺は少し小声で質問をする。

「変わつてはいないよ。それに、圭は誤解している。正解なんてな
いんだよ」

「いや……、何言つてるんだ？」

「一つ忠告。未来は絶対に変えられない。変えたように見えて、私

から見て何一つ変わつてはいない」「

つまり、伊吹圭であつた頃の記憶と一致する、という意味。彼女はこの、少し変化した世界での俺の来世である。俺の記憶にある片平奈羽ではない。

話を飛躍させると、今まで感じていた違和感、岡本、悠一、咲良であつた時の他の四人は別人ではないかといった違和感の答え。そう、厳密に言えば別人なのだ。

「そう、それが一番正解に近い。私達は一人だけれども、一人じゃない」

俺の思考を読んだかのように彼女が答える。

俺は思い違いをしていた。全員が連續して前世であり、来世である。今世の他の四人は前世世界の四人とは別人である。

「そう、ならばどうするの？ 人助けをするの？ 人道的に見てそうよね？ 自分の事ならば仕方ない、運命だよね……、って割り切れるけど、別人ならばそうはいかない」

またもや、奈羽が言つ。

「あなたは私の前世かもしれないけど、私はあなたの来世ではない。これだけは断言できる」

奈羽はにつこり微笑む。

「俺にそんな事言つていいのかよ？」

「うん？ これはあなたに必要な会話だからしてるので。どこかで聞いた台詞だけね」

「俺が咲良に言った台詞かよ……。予定通りで俺にはどうしようもない会話か……」

「そういうこと」

食堂は騒がしかつたが、俺達一人だけが別次元にいるようだつた。大体、どういう意味だ？ 俺は奈羽の前世なのに、奈羽は俺の来世ではない？

「話はこれだけ、じゃあね圭。ごゆっくり。前世世界での私が他の三人を探しに行つたから私も行かないとな。何をしてるのか、ちょ

つと楽しみ

意味不明。 ただ、 意味不明。

彼女は小走りに消えていく。

いつた

い俺はどうしたらいいんだ？

第四章（3）

整理すると、今世の他の4人は別の誰かという事。誰なんだよ……。奈羽は俺の来世ではない？ じゃあ、なんで、あんなに何もかも知っているんだよ？ いや、前世は伊吹圭かもしけないと言つていたよな。かもしれない？ どうして曖昧なんだよ。

俺の来世ではないと、断言できるのに、自分の前世かもしけない？ なんだ、その矛盾は……。

更に、奈羽の言つとおり、今世の他の4人が前世世界の4人とは別人ならば、俺一人、つまり、前世、来世を含め俺一人の問題ではなくなる。

そう、過去の3人が辛い思いをし、死んだのも現在進行形ではあるが、俺個人にとっては、ただの過去のリプレイでしかないといった感情が芽生えていた。気の毒ではあるが、仕方ないこと、もう決まっていることと、割り切つてしまっていた。どうせ死んでも、こうして来世があるのだから問題はないと……。

だが、彼等が別人ならば、彼等が死んでしまつたら取り返しがつかない、二度と会えなくなる。

「俺達は一人だけど、一人じゃない……」

それぞれ、ちゃんと生きている。

なんで、俺は岡本や悠一や咲良の命をこんなに軽くみているんだ？ 奈羽はこの事を言いたかったのか？

予定変更だ。前世と来世は関係ない、俺は俺個人として、他の4人もそれぞれ、個人として扱う。岡本、悠一、咲良をちゃんと尊重しろ。

前世での俺は以前の3人をただの過去として扱ってきた。俺はそんな事はしない。俺と前世世界の伊吹圭とは別人だ。

今日の放課後……。思い出したが、咲良の時に奈羽と岡本が、岡

本の家の裏山にいたよな？ なんでいるんだ？ 奈羽は合唱部の掃除や準備をしていったはずだよな。

咲良が裏山に行つたのを知つていたから、急遽予定を変更した……。としか考えられない。

行くか、行かないかを迷う必要はない。未来が変わる心配もない。なぜなら、ここは、ここで独立した世界だからだ。好きなように生きる。その、結果が、奈羽の記憶と一致するのならば……、いや、どう行動しようが一致するだろう。

俺は放課後に岡本の家の裏山へと向かつ。当然、咲良の時の記憶と一致しないものになるだろう。ここから先は未知の世界、恐らく、奈羽だけが知つている世界。

枯れ草の目立つ山道。道は歩きやすい。ゆっくりと目的の場所を目指す。子供の頃に秘密基地を作つた場所。

「揃つたね」

広場に着くと、そう言葉が聞こえた。片平奈羽の声だ。

「遅いぞ」

「あんたは、もっと余裕を持つて行動しなさい」

次の声は悠一と岡本だ。咲良もいる。この場所に俺達5人が集合している。

「ああ、ごめん」

俺も答える。今更驚きもしない。何があつても予定通りだ。

「奈羽ちゃん……？」

咲良だけが不審気に尋ねる。

「大丈夫だよ咲良、心配いらないよ」

奈羽が優しく言つ。

「さて、大事なお話

彼女が話しだした。

「圭と咲良は知つているから大丈夫だけど、日和と悠一は信じられないかもしない。でも、我慢して聞いてね」

奈羽は一人を見て微笑む。言いたい事は想像がつくが、言うのか

? いや、前世世界の奈羽は言ったのか？

「私達5人は同一人物です」

沈黙。

「全員、私の前世。日和、次に悠一、咲良、圭と続き、一番最後に私、片平奈羽。全員、私の弟や妹達なんだよ」

そう言い彼女はにつこりと笑う。

「意味がわからない」

「なんかのゲーム？」

悠一と岡本が言う。

「咲良、説明してあげて。出来るよね？」

「あ、うん、奈羽ちゃん……。えつと、これは生まれ変わり、日和ちゃんが死んだら、次に悠君に生まれ変わつて……、また、死んだら私に生まれ変わる……」

たどたどしく咲良が説明する。

「いや、死んでないだろ」

悠一が疑問を投げかける。

「うん。これから死ぬの。これから死んで生まれ変わるの……、なんて言つたらいいかわからないけど……」

「同一時間軸に前世と来世が混在する。俺達は一人の人間だ。と、同時に別々の個人もある」

俺が咲良に助け舟をだす。

「「そんなの信じられないよ」」

岡本と奈羽の声が重なる。

「「奈羽?」」

また重なる。

「「怖いよ、やめてよ」」

延々と奈羽が岡本の台詞に重ね続ける。これで確定だ。奈羽は単に予定された行動をトレースしているだけ。

つまり、彼女がこの場の支配者。

誰も奈羽には逆らえない、未来を変えられない。彼女は未来を変

えてない、逆に言えば、奈羽にとって都合の良い展開が待つ、という意味を持つのだ。

「ごめんね、日和。これはあなたに対しての嫌がらせじゃなくて、圭に対して立場をわからせる為にしているの。わかった、圭？」

「ああ……。もういい、わかった」

「わかつてないよ。いい？　圭の知っている未来はもう来ない。この意味を理解している？　どこで何をしても違う未来が待っている。あなたは私の前世かもしれないけど、あなたの来世は私ではない、この意味を理解しなさい」

なんだ？　冷や汗が出てくる。これは明確な敵対宣言か？　何をしても、未来を変えられない、何をしても奈羽の記憶通り、予定通りという意味。

「お前が元凶か？」

俺はそう尋ねる。

「質問すら無意味。言葉すら無意味。何度言えばわかるの？　不出来な弟ね」

「なんだよ？　喧嘩売つてんのかよ？」

「立場がわからない？　本当に不出来ね」

「なんで喧嘩してるの？　ねえ、やめてよ。泣きそりだよ」

また岡本と奈羽の言葉が重なる。

「わかった？」

俺は言葉もない。岡本がついに泣き出してしまった。

「ごめんね、日和。怖かったよね。圭はホント短気だよね」

「なあうう……、どういう事なのぉ？」

「そうね。日和は悪い夢を見るんだよ。まあ、帰りましょっ」

奈羽が岡本の肩を抱き、山を降りる。
俺達3人は呆然と見送る。

「なあ？　本当なのか、さつきの話」

「本当だよ」

悠一の質問に咲良が短く答える。

「まじかよ、おかしいと思つたんだよ。岡本の……、いや、なんでもない」

悠一が何を言いたいかは想像がつくが、彼の名誉の為に黙つておく。それより気になることがある。

「咲良、悠一。昼休みは、どこで何をしていた？ 岡本も一緒にだったのか？」

「うん？ 奈羽ちゃんがたまにはお外で食べよつけて、ほら口和ちやんのお気に入りのイチヨウの木の下で」

「お前こそ、どこで何していたんだよ？ 待つてたんぜ、みんな」

俺の質問に咲良、悠一と答える。

「なるほどね。全部デタラメ、言つた事は全部嘘かよ……」

「圭君……？」

質問に意味はない、言葉に意味はないか……。俺との交際をしたのも、全部予定通りで意味もなれば、本心でもないくとかよ。

「なあ？ 腹たたないか？ ちゃんと俺を人間扱いしろよ。俺だってさ、感情があるんだよ。辛いんだよ。予定通りでもよ、死ぬほど考へてるんだよ。お前等だつて、そうだろ？」

「圭君、言つては悪いけど、私もあなたに同じ感情持つてるかもしれないよ」

「咲良……」

それは、当然だろう、俺が咲良だった時は伊吹圭には不信感しかなかつた。あの即答には頭がおかしくなりかけた。なぜ、俺はそんな事をしたんだ……。そう、過去だと見下していたから、咲良の気持ちなんて、どうでもいいから……、必要な会話だから、手っ取り早く済ませたかったから……。

「すまない、咲良。悠一も……」

俺は誓う。片平奈羽のようにはならない。人として、別の個人として、前世の3人と接する。

明確な拒絶。

片平奈羽のそれは明確な拒絶だ。その事実に少なからず動搖がある。それは、初めてのことだったからだ。多少の意見の相違は度々あつたが、ここまで決裂することはなかつた。

今までと決定的に異なるのは、奈羽が最後まで折れなかつた。いつも必ず奈羽が意見を教えてくれた、許してくれた。そう、だからこそ、これは明確な拒絶なのだ、決裂なのだ。

などと、考えていたら、昼休みに奈羽に出くわす。

「圭？ やつと見つけた」

奈羽がいつもの無邪気な笑顔で話してくれる。その笑顔が痛い……。

「はい、お弁当。昨日約束してたよね。一緒に食べたかったけど、圭がどこにもいないから先に食べちゃつた」

薄いブルー弁当袋を渡される。

「え？ あ？ う？」

「残さず食べてね。あとで感想聞くからね。じゃあ放課後、部室で会いましょう」

奈羽は明るく手を振り、走り去つていく。なんだ？ この展開は？ どうすればいいんだ、この弁当は？ いや、食べようよ。ここで食べるんだよ！？

まずい、こんな物を人に見つかつたら大変だ……。どうしよう…？ 捨てる？ 捨てちゃうの？ 奈羽が泣くよ？ ああ見えてね、よく泣くんだよ、誰もいない所で一人で……、声も出さないで寂しくさ……。

……。

うん、食べる……。

俺は走る。どこへ？ そうだ、倉庫がいい。誰もいないはず。

ふう。俺は倉庫裏で一息つき、座る。誰にも見つかってないよな？ なんで？ 見つかって悪いの？ というか、渡された時、いっぱい見られてたよ？ 嘘！？ やばい、本格的に嫉妬による連續殺

人事件が起きてしまつ……。というか、岡本さん、いつから俺の頭の中に？え？あんたが生まれた時から？などと一人芝居をしてる場合じゃない……。

袋を開け、弁当を取り出す。中から紙切れが……。
『最愛の圭へ。圭の好きなものがわからないから、私と同じにしました。喜んで貰えたら嬉しいです』

……。

なあ？おかしいだろ？おかしくないでしょ？奈羽つていういつの好きだよ。付き合せれる俺の身にもなれ……。
うん、でも弁当はうまい。さつき、ラーメン食つたけど、うまい。
「で？結局木村君は来なかつたと……」

どこからか会話が聞こえる。

「うん。ずっと待つてたけど来なかつた」

「あいつ調子に乗つてんじやないの？仕返しあなくしていいの？」

「そうだね、でも悔しいけどしようがないよ。片平さんと比べたらどうしてもね……」

何やら聞いた事のある声と、木村、片平と馴染みの単語が出てくる。俺は見つからないように息を潜める。つて、見つかって悪いの？せつきからどうしたの？いや、気まずいよ……。

「片平ね……。あいつもマジむかつくなね……」

あんたもさ、もう少し堂々としたら？なんで、奈羽のお弁当をそんなに隠すの？いや、なんか照るからさ……。

「そうだね、一番許せないのは片平さんだね」

はあ？恥ずかしいとか言つてんの？あんたが一番、奈羽を軽くみてんじゃないの？まあ、それはな……、何をやっても許してくれるつて甘えてたかもな……。結局、奈羽の事どう思つてんの？俺は……、なんていうか、多分、あいつに必要とされたい。奈羽をどう思つとかじゃないんだ……。

予鈴が聞こえる。先程までの声の主は消えていた。俺も少し落ち込みぎみに教室へと戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1557z/>

5番目の蠍

2012年1月10日22時50分発行